

『中宮亮重家朝臣家歌合』注釈(二)

武田元治

月

一番 左持

権中納言

五七なにかくふけゆく月をしむらんまつに心はつきにしものを

右

小侍従

五八ころすむをりからなれや月かげの秋しもなにか光そふべき

左歌、心ありてをかしくは侍るが、いざよひ、ぬまのほど、心をつくしはてて、くまなくすめらん空をばすくなくて見んこと、あひなくやあらん。右歌、心すむをりからなれやといへるは、すがたも心もをかしきこゆるを、秋しもなにかとよまれたるや、すこしこととのちにたがふらん。四序五行随レ節運転、秋は少陰之位也。月又陰之精也。かかれは、月の影もひかりをそへ、人の心もあはれをますべきをりにて侍るなり。されば、秋しも光のますことはことわりなりとぞあらまほしき。されど、いづれも歌さまをかし。仍為レ持。

【通釈】

月

一番 左持

権中納言

五七一体どんな心が(残っていて、このように更けてゆく月を惜しむの)であらう、——月を待つのに心は尽くし果てたと思ふのに。

右

小侍従

五八月が澄んで明るく見えるのは、心が澄む時節のためなのだろうか、

——月が秋に限って、どうして光の加わるわけがあらうか。

左の歌は、思い入れたところがあつて面白いとは思いますが、十六夜の月や、居待ちの月(十八日の夜の月)のころ、月の出を待つのに心を尽くし果てて、月の曇りなく澄んでいる空を不十分な心で見ようなことは、筋違いだらうかと思う。右の歌は、「心澄む折からなれや」と詠んでいるのは、その姿も心も面白く思われるが、「秋しもなにか(光そふべき)」と詠まれたのは、少々道理に外れているだらうかと思う。四季の順序や五行は決まった時の順に巡って行くので、その中で秋は少陰に位置する。一方月も陰を純粹に表す存在である。そういう次第であるから、秋は月も光も加え、人の心もひとしおあわれを催すはずの季節なのです。そのため、秋には月の光の加わることは当然であるとして詠むのが望ましいと思う。しかし、左右いずれも歌い様が面白い。それで持と判定する。

【注】○なれや「なり」の已然形に「や」の添った形。疑問・詠嘆の意を表して、ここで切れ、……のためなのだろうか、の意。○いざよひ陰曆十六日の夜の月。○ぬまち 陰曆十八日の夜の月。少し遅れて出るので、すわって待つところから居待ちという。○すくなくて ここでは、心少なくて、の意であらう。○あひなくやあらん 筋違いであらうかと思う。「あひなし」は「あいなし」と同じ語と見られる。○ことのちにたがふ「ことのち」は「ことのり、ことわりナドノ誤力」とされる

『平安朝歌合大成』の見解に従いたい。○四序 春夏秋冬の順序。四季の移り変り。○五行 万物を生じる五元素としての木火土金水の運行。○随レ節運転 時のきまりに従って巡って行く。○秋は少陰の位也 四季を陰陽の二元素から見て、春夏を陽、秋冬を陰とした上で、秋を少陰、冬を太陰とする見方による。○月又陰之精也 日を陽、月を陰とする見方に基づき、月を陰の純粹なものとして言う。

【考察】左の歌は、更けゆく月を惜しむ心を基調とするが、月の出を待つのに心を尽くしきったと思うのに一体どんな心が残っていたことかといぶかる気持ちの作に仕立てた点に、作者の趣向があるのである。

右の歌は、秋の月の澄んだ明るさをとり上げているが、その澄んだ明るさは人の心の澄む時節のためだろうか、月の光が特に秋に加わるはずがないと、独自の見方を詠んでおり、そこにやはり作者の趣向があると思われる。

俊成の判詞は、二首ともに「をかし」と評する一方で、趣向に無理があるのを批判している。すなわち、左歌については、月の出を待つのに心を尽くし果てて不十分な心で明月を見るのでは、明月を賞する歌として筋が通らないと指摘したものと思われる。また右歌については、月の光が秋に特に加わるはずがないと詠むのは、道理に合わない指摘する。その場合、陰陽五行の説を引き、秋も月も陰に属するものだから、秋は特に月も光も加え、人の心も一段とあわれを増すのが道理であろうと説く。このような説明には多少ペダンチックなところがあると言えるかもしれないが、こういう批評の仕方は、俊成が歌の師の基俊から受け継いだところであつたかと思う。

二番 左持

別当

五九あかなくのころづからに契りおきて千代てふあきの月を見てしか

右

参川

六〇あまのはらくもらぬ月をながむればころもはる物にぞありける

左は多秋の月をちぎらんなど、心なくすゑたり。右はすがたはをか

しく見ゆるを、心もはるといはんために、くもらぬ月をとおかれたる、はるる、くもらぬ、おなじ事なれば、わけしるべきにもあらずやあらむ。されど、歌のさまただかに見ゆれば、これもちとす。

【通釈】

二番 左持

別当

五九(秋の月を)見飽きない心から、あらかじめ約束しておいて、千年も続くという秋の月を長く見たいと思う。

右

参河

六〇大空に、曇らぬ月をつくづく眺めていると、おのずと心も晴れることでした。

左の歌は、多くの秋にわたる月を見ることを約束しようなどと、深い心もなく詠んでいる。右の歌は、歌の姿は面白く見えるけれど、「心も晴るる」と言うために、「曇らぬ月を」と言われたものと思うが、「晴るる」と「曇らぬ」は同じことなので、これを区別して受けとるのは無理だろうか(すると同心病か)と思う。しかし、歌の姿は滞らず詠まれていると見えるので、これも持と判定する。

【注】○あかなくの 飽きない思ひの。「あかなく」の「な」は打消の助動詞「ず」の未然形、「く」は接尾語で、ク語法。「あかなく」の用例は多くはないが、「おくれあて思ひおこせよあかなくの別るる道にまよふ心を」(『久安百首』五九二)等がある。○ころづからに 自分の心から。○てしか 助動詞「つ」の連用形に、願望の意の終助詞「しか」が続いて一語化した終助詞。上代語では「てしか」であるが、後に「てしが」とも言われた。『平安朝歌合大成』は「てしが」の形を採る。○わけしる 区別して理解する。

【考察】左の歌は、秋の月を見飽きない心から「契りおきて」「千代てふ秋の月」を見たいと思う、と詠む。この第三句以下の言葉は、「月契千秋」(「月千秋を契る」という歌題を思わせるところがある。「月契千秋」の題で歌の詠まれた例は、やや古いものでは、

月契千秋

いつよりも月のどこかにみゆるかな千とせの秋のはじめとおもへば
『在良集』一三三

がある。またこの歌合に近いころの例と見られるものに、この歌合の歌人である公重や経盛の次のような作もある。

月千秋をちぎるといふことを

千代をへてすむべきあきの月なればいづるよりこそこのどけかりけれ

(公重『風情集』四二)

二条院御時、月宴せさせおはしますべしとて、月契千秋といふことを人人うけ給りてよみ侍りし時よめる

我が君はちとせのあきをむかへつついくよかつきのすむをみるべき

『経盛集』一二五

これらの場合、「月契千秋」という歌題は、当然のことながら月が千秋を契ると見えることを意味するものとして扱われている。それに対して左歌は、この歌題を思わせるような語句をちりばめているが、自分が「契りおきて」「千代てふ秋の月」を見たいと詠んでおり、この歌題の示すところとは異なる発想の作である。ただその発想は別に出色のものではなく、ごく普通の思い付きに属するかと思う。

右の歌は、曇りない月を眺めていると心もおのずと晴れる、と詠む。平明な作である。

俊成の判詞は、左歌については、「多秋の月をちぎらんなど、心なくすゑたり」と批評する。これは前述のように、「月千秋を契る」などの歌題の伝統があるのを念頭に置いた批判ではあるまいか。ともかく、自分が「契りおきて」「千代てふ秋の月」を見たいと詠んだのを、底の浅い思い付きとしているようである。

右歌については、「姿はをかしく見ゆる」とか、「歌のさまなだらかに見ゆ」とか言つて、一首全体の姿は肯定しているが、「心もはるる」の「はるる」と、「くもらぬ月を」の「くもらぬ」とを「同じ事」と指摘している。これは歌病の一つ「同心病」を意識した批判であろうと思う。『俊頼髓脳』では「同心の病」の例に『亭子院歌合』の貫之の歌、

山桜さきぬるときはつねよりも峰の白雲たちまざりけり(四)

を引いて、「山」と「峰」の重複を指摘している。一首の中で異語でも同義の語が重なるのが同心病である。後の俊成の『古来風体抄』は煩瑣な歌病の説を概して退けながらも、「同心の病ぞ、むねと避るべき事には侍るべき」(再撰本)としている。

三番

左持

宰相中将

六一ながむれば雲井はるかにすみのぼる心や月の影とそふらむ

右

弁

六二まつ人のこぬもおもへばいかげん月を見すていりもせましに

左は心すがたをかしく見ゆるを、月影に心をそへたること、ちかき歌あはせどもに見たまへしにや、めなれたる心地ぞする。右は人をまつ心はおほくして、月を見ることばすくなくやあらむ。また持などにこそ。

【通釈】

三番

左持

宰相中将

六一月を眺めていると、月とともに心も澄み、大空はるかに昇つてゆく気がする。この心は月影と重なっているのだろうか。

右

弁

六二待つ人が来ないのも、思い直すと、差し支えない気になる、——もし人が来たら、月を見捨てて奥へ入りもしようから。

左の歌は心も姿も面白く見えるが、月影に心を合わせたことを詠んでいるのは、近いころの歌合などでも(同じ発想の歌を)見掛けましたためか、見慣れている気がする。右の歌は、人待つ心が多く出ていて、月を見る言葉が少ないうちがあらうかと思う。この左の右の歌もまた持というところであらう。

【注】○すみのぼる 澄んで高く昇る。本来月について言われる語で、『源氏物語』(宿木)などにも「をばすて山の月澄みのほりて、夜ふくるままでに、よろづ思ひ乱れたまふ」と言われている。それを、この左歌

のように月を眺める心について用いた先例には、源俊頼の「すみのぼる心や空をはらふらん雲のちりぬ秋の夜の月」(『散木奇歌集』五〇四、『金葉集』一八八)がある。

【考察】左の歌は、月を眺めていると心が月と一体化して「澄みのぼる」心になると詠んでいる。「澄みのぼる心」と詠んだ先例は、「注」に挙げたように源俊頼の

すみのぼる心や空をはらふらん雲のちりぬ秋の夜の月(『散木奇歌集』五〇四、『金葉集』一八八)

が古い例であろう。この俊頼の歌は後代に影響するところがあつたようで、左歌との前後関係は明らかでないが、俊恵の歌にも、

すみのぼる心や空に立ちそひて今夜の月の影となるらん(『林葉和歌集』四二六)

と詠まれている。『林葉和歌集』の題詞に「歌林苑歌合」と書き添えられた一首である。

また「澄みのぼる心」とは言っていないが「澄みのぼる月」と一体化した「心」を詠んだ歌もある。『詞花集』には、

すみのぼる月のひかりにさそはれて雲の上までゆく心かな(二九三、藤原実行)

の一首が見える。歌合でも、

山の端のうき雲晴れてすみのぼる月と共にゆく心かな(大治三年『西宮歌合』四、兵衛督君)

と詠まれている。なお類似した発想の歌に、

雲の上のこよひの月にさそはれて空になり行くわが心かな(大治五年『殿上蔵人歌合』五、盛定)

もある。左歌がこれらの歌ですでに類型化された発想によっている点は否定できない。

右の歌は、待つ人が来なくても構わない。もし来たら月を見捨てて内に入ることもなるから、と詠む。この歌も、先行作、

待つ人のこぬもおもへばつらからずねなばこよひの月を見ましや

(永暦元年『清輔朝臣家歌合』三三、空仁)
と一・二句が共通し、発想が類似している。

俊成の判詞は、左歌については、「心姿をかしく」と評しながらも、発想が詠み古されていると批判する。右歌については、題の「月」に焦点を置く態度が不十分であると批判し、持と判定している。

四番 左持 左大弁

六三くまもなきみそらに秋の月すめば庭には冬の氷をぞしく

右京大夫

六四名にたかきをばすて山の月影も秋はことにぞ照りまさりける

右

左歌、銀漢雲尽秋月澄澄、沙庭霜凝冬氷凜凜。見其文体、已以二詩篇。心匠之至、尤可レ詠レ之。右歌、をばすて山の月も秋なりといへる、猶詠レ月の歌、已当三正理。ことにめづらしきところなけれど、歌合の歌と見えたり。仍又為レ持畢。

【通釈】

四番 左持 左大弁

六三雲一つない空に秋の月が澄みわたると、(その光で)庭には冬の氷を敷きつめたと見える。

右 右京大夫

六四名高い姨捨山の月の光が、秋はとりわけ、輝きを増すことです。

左の歌は、銀河に残る雲もなく、秋の月が澄みきって、庭の砂に霜がおき、冬の氷がさえわたるとも見える様子を詠む。一首の姿を見ると、さながら詩のような趣がある。趣向が優れていて、まことに賞翫すべき作である。右の歌で、有名な姨捨山の月も秋が特にいと詠んでいるのは、やはり月を詠む歌として、道理に合ったものであろう。格別目新しい点はないけれども、歌合にふさわしい歌と思われる。そこで、この勝負も持と判定した。

【注】○くまもなきみそら 曇りなく晴れた空。「みそら」の「み」は美称の接頭語。○氷をぞしく 氷を敷いたように見える。月光を受けた地

面が、氷のように輝く様子を言った。『和漢朗詠集』（十五夜）に、「秦甸之一千余里 凜々 氷鋪」とある。○をばすて山 姨捨山。信濃の国の歌枕で、月の名所。今の長野県埴科郡戸倉町と更級郡上山田町との境にある冠着山がそれであると言われる。○銀漢雲尽 天の川に雲がなくな。『古今集』よみ人しらずの歌に「天の河雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞなぐる」（八八二）と詠まれ、天の川を雲の移動する「水脈」（海や川で水が深く舟の通路となる所）と見る見方があったようである。○澄澄 澄みわたる様子。『和漢朗詠集』（十五夜）に、「漢家之三十六宮、澄々 粉飴」とある。○凜凜 りんりん。寒さが身にしみる様子。用例を「氷をぞしく」の注に引いた。○以三詩篇一 『平安朝歌合大成』に「似詩篇ノ誤力」とするのに従いたい。詩に似ている、詩のようだ、の意であろう。○心匠之至 しんしょうのいたり。趣向として至極のもの。「心匠」は、心の中の工夫を意味するが、ここでは趣向を主として言ったと見たい。○尤可レ翫之 もつともこれをもてあそぶべし。まことに賞翫すべきである。いかにも珍重すべき作であろう。○歌合の歌歌合の場にふさわしい歌。これについて『後鳥羽院御口伝』では俊成らの説として次のように言う。「歌合の歌をば、いたく思ふままにはよまずとこそ、釈阿、寂蓮などは申しか。別の様にてはなし。題の心をよくおもはへて、病なく、又源氏等の物語の歌の心をばとらず、詞をとるはくるしからずと申しき」（『日本歌学大系』による）。ここでは歌合の歌は特に題の心を生かし、歌病などの難のないように詠むべきものとされている。また俊成の孫の為家の『詠歌一体』では次のように言う。「歌合の歌は、特に失錯なく、人の難じつべからむ事をかねてよくよくみるべし。たけも有、物にもうつましからむ姿を詠むべし。これを晴の歌と申めり」（『歌論集一』甲本による）。ここでは非難されるような失錯のない歌で、格調のある晴の歌が考えられている。この場合題のことには触れていないが、『詠歌一体』では詠歌の心得の第一に「題をよくよく心得べき事」を挙げ、それを当然の前提としているためであろう。

【考察】左の歌は、夜空に秋の月が澄みわたると、その光で庭は「氷をぞ

しく」と詠んでいる。この形容は、「注」に挙げたように『和漢朗詠集』の「十五夜」の詩句、

秦甸之一千余里 凜々 氷鋪（二四〇）

を思わせる、特徴的な表現であろう。

右の歌は、名高い姨捨山の月影が秋はとりわけ輝きを増す、と詠む。比較的単純で、平明な一首であろう。

俊成の判詞は、左歌については詩の風趣があるのを特長と見、「心匠之至」と称美する。左歌の特徴に応じて判詞も漢文で書いたかと思われるが、歌の情景に関して「秋月澄澄」「冬氷凜凜」などと記すのは、『和漢朗詠集』の十五夜の詩句を俊成も思い浮かべて、これらの語句を用いたと見られる。

右歌については、「めづらしきところなけれど」と言いながらも、「歌合の歌」としての長所を認め、持と判定している。

この持という判定は、左右の歌を比較すると、右歌の評価が高すぎると思われるが、これは右歌の格調のおおらかな点などを特に高く評価したのであろうか。しかし俊成は『千載集』に左歌は選んでいるが右歌は選んでいないから、結局左歌ほどには右歌を評価しなかったと考えられる。

【備考】四番左歌は『千載集』（二七九）に収められている。

五番 左持

重家朝臣

六五いかでわれしはしこのよにながらへて月見る秋のかずをかさねむ

右

頼政

六六月影にうづもれぬと思ふらむ雪にならへるこしの里人

左歌、不レ飾三文花一、偏全三義実一。夫ことにさることときこゆ。

右、うづもれぬとおもふらなどいへる、すがたいひなれて心もをかしくはべるが、こしの里人やすこし荒涼ならむ。こしの国こそ申すめれ。その国にもさだめて里はあらめど、おしこめてこしのさといはむことはいかが。されど、これはあまりのことにもあら

む。左はことばをかざらずして月をおもへる心ふかし。右はおぼつかなきところもあれど、すがたをかしければ、これも又持とす。

【通釈】

五番 左持

重家朝臣

六五ぜひ私は、しばらくこの世に生き承らえて、月を見る秋の数を重ねようと思う

右

頼政

六六一面に降り注ぐ月の光に、埋もれたと思っっているであろうか、——雪に（埋もれるのに）慣れた越の里人は。

左の歌は、言葉美しく飾り立てることをせずに、ひとえに心そのままを伝える態度に徹している。これは、特にしかるべきことと思われる。右の歌は、「（月影に）うづもれぬと思ふらん」などと詠んでいる点、熟練した歌の姿で、心も面白いのですが、「越の里人」はいささか漠然とした言い方であろう。「越の国」とは言うようである。その越の国にも必ずや里はあるが、それを一括して「越の里」と呼ぶことは、いかがであろうか。しかし、こういう指摘は度を越えた批判に属するかもしれない。（総じて言えば）左の歌は言葉飾らず詠んでいて、月を思う心が深い。右の歌は不審な点もあるけれども、歌の姿が面白いので、この勝負もまた持とする。

【注】○こし 越。北陸地方の古称。後に越前・越中・越後に分かれる。今の福井・石川・新潟・富山の諸県。○文花 文章が華やかで美しいこと。○義実 内容が質実であること。『和歌体十種』では「直体」について「義実以レ無曲折一為レ得耳」と説明する。長承三年『中宮亮顕輔家歌合』の基俊の判詞では、それを受けて「義実雖レ無曲折一、言泉已凡流也」（紅葉一番）と評した例がある外、「文花」と並べて「文花義実、共無等級」（恋一番）と評した例などもある。○いひなれて 表現が熟練していて。○荒涼 漠然としている様子を、ここでは言う。【考察】左の歌は、ぜび生き承らえて月を見る秋を重ねたいとの心を、率直に詠んでいる。

右の歌は、月影に埋もれたと思っっているであろうか、雪に慣れた越の里人は、と詠んでいる。これは月影に埋もれるという発想が新鮮で、それを雪に（埋もれるのに）慣れた越の人に結びつけた点に巧みさがあると思う。

俊成の判詞で、左の歌について、「文花」を飾らず「義実」を全うしていると思評したのは、「注」に挙げたような基俊の批評の観点を取り入れたと思われるが、要するに「言葉を飾らずして月を思へる心深し」という点を評価したのであろう。

右の歌については、「言ひ慣れ」た（熟練した）歌い方で、心あるはその心を表現した姿が「をかし」と評価する一方、「越の里人」という用語は適切でないとして、少し「荒涼ならむ」と指摘する。ただしこの指摘は一首全体の姿から見ると小さな問題に関するものであることを俊成も承知していたようである。判定は持とされる。

六番

左持

経盛朝臣

六七我がころろあくがれにけり清見がた波ちはるかにてる月をみて

右

師光

六八あきの夜は月の舟にやのりぬらんあかしの浦へゆくころかな
左右おなじほどに見ゆるにとりて、左は、なみぢはるかにてる月を見てといへるすがた、いときよげに見ゆ。右は、是も歌さまはいとをかしきこゆるを、月の舟にやのりぬらんとならば、あまのかはらなどや、いますこしいはれたらん。明石の浦までは、ただよのつねの舟にてもいとやすくかよふべきにやとおほゆれば、左のかちと申すべし。

【通釈】

六番

左持

経盛朝臣

六七わたしの心は、（わが身を離れて）遠くさまよって行つた、——清見の波路はるかに照る月を見て。

右

師光

六八秋の夜は、(月に心を引かれて) 月の舟に乗ったのであろうか、明石の浦へ行く心地がする。

左右の歌は一応同様の程度の作品と見えるが、それにつけて言えば、左の歌は、「波路はるかに照る月を見て」と詠んだ歌の姿が、まことに美しく感じられる。右の歌は、これも歌の様子は太層面白く思われるが、「月の舟にや乗りぬらん」ということならば、(月の舟の行く先は) 天の川原などの方が、今すこしもつともな場所として受け取られるであらう。「明石の浦」までは、ただ普通の舟でもごく容易に通うことが可能であらうかと思われるので、(その点を考慮して) 左の勝と判定しよう。

【注】○我がこころあくがれにけり ここでは、月に心を引かれて、自分の心が身から離れてさまよい出た状態を言う。「あくがれ」の語源説で「あく」は諸説があるが、「かる」は離れる意の動詞と見られている。○清見がた 駿河の国の歌枕。今の静岡県清水市興津町、清見が関付近から三保の崎あたりの前方の潟状の海。○月の舟 太空を移動すると見える月を、海を渡る舟に例えて言う語。『万葉集』に「天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎ隠る見ゆ」(二〇七二、人麻呂歌集)の歌があり、その第一句を「空の海に」とした形で『拾遺集』(四八八)にも人麻呂の作として収められている。○あかしの浦 播磨の国の歌枕。今の兵庫県明石市の海岸。「明石」は、明るい意の「明し」に音が通じるところから月の名所として歌に詠まれることもあった。「ありあけの月も明石の浦風に波ばかりこそよると見えしか」(『金葉集』二二六、平忠盛)など。○あまのかはら 天の川(銀河)の川原。

【考察】左右の二首は共に月に引かれる心を歌っているが、左の歌は、清見潟の波路はるかに照る月を見て、その月に引かれて「我が心あくがれにけり」と詠む。自分の心はわが身から離れてさまよって行った、というのであろう。こういう思いは、皇居宮肥後の歌、

月を見て思ふ心のままならば行方もしらずあくがれなまし(『金葉集』

一八九)

などにも詠まれている。しかし、その思いを清見潟の海上はるかに照る月に即して詠んだ点は左歌の特長であらう。

右の歌は、月に心を引かれ、月の舟に乗って明石の浦へ行く心地がする、と詠む。空を渡る月を舟に例えて「月の舟」と言うことは『万葉集』(二〇七二)『拾遺集』(四八八)にも見られるが、月に引かれる心を「月の舟」に乗って明石の浦へ行く心地がする、と詠んだのは、明石が(「明し」に通じて)月の名所である点も考慮して、そういう趣向の面白さに特色を示そうとしたのであろう。

俊成の判詞は、左右の歌を一応「同じほど」としながらも、左の歌については「波路はるかに照る月を見て」と詠んだ歌の姿を「いときよげに見ゆ」と評価する。右の歌については「歌さまはいとをかし」と評価するが、「月の舟」に乗ったというのなら、その行く先は「天の川原」などがより適当なのではないか、「明石の浦」では現実的になり過ぎるのではないかと指摘している。月の舟に乗って行くという空想の世界を、中途半端に現実に引きもどさず、空想的世界に徹底した方がよいとの考えによると見られる。適切な指摘であらう。

七番 左

六九くもるとて今夜ねたらば月影の深行くそらのかげをみましや

右勝

頼輔

七〇夜もすがらさえたる月の影みれば水なき庭も氷りしにけり

左の歌の、かげを見ましやと優にしもあらずやきこゆらん。右歌はことにめづらしきところなけれども、いひしりてきこゆ。右のかちと見えたり。

【通釈】

七番 左

六九曇っている(月は見えない)と思って、今宵寝ていたら、更けてゆく空の月影を見ることができたであらうか。

右勝

頼輔

七〇夜通し澄みわたった月の光（のさすところ）を見ると、水のない庭も、水が張りつめたと見えた。

左の歌で、月の「かげを見ましや」などと詠んでいるが、優美には感じられないであろうかと思う。右の歌は、特に目新しい点はないけれども、歌の詠み様を心得ていると思われる。右の勝と見られる。

【注】○かげをみましや（月の）光を見ることができたであろうか。反語の言い方。

【考察】左の歌は、曇って月は見えないうちと思つて寝ていたとすれば、夜更けの空に澄む月は見られなかつただろう、と詠む。

右の歌は、夜通しさえわたる月の光で、庭は水が張りつめたように見える、と詠む。

俊成の判詞は、左の歌については、第五句の「かげを見ましや」を引き、「優」でないとする。これは、この第五句だけを見れば、反語の形で強く言い切った点に関して批判したことになるか。ただ「……を見ましや」を歌の末尾に置いた先例に、

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや（古今集）
一一八

という貫之の作があるので対照すると、貫之の作は上句に、風と谷川の水がなかつたら、という条件を設けていて、落花が流水に浮かぶ様子を想像させる詠み方であるが、左歌は「くもると今夜寝たらば」という自己の現実的な条件が、月の「かげを見ましや」に直接つながる詠み方である。そういう点が左歌の「優にあらざ」と見られることに関係しているのではないかと思う。

右の歌については、「ことにめづらしきところ」はないが、「言ひしりてきこゆ」と、つばを押さえた詠み様を評価して勝としている。

八番 左勝持（新校群書類従）

通能朝臣

七二秋ごとに今夜ばかりのかげを見はめづらしげなき光ならまし

右

有房

三月により山の端のみかこつかなまつもをしむもおなじころに

左、今夜の月を賞するころはをかしくもはべるか（秋成）首句にかげを見はといひて、卒章に光ならましといへる、影と光といへるおなじ事を二所におかれたるやうにあらん。右は、山のはをのみかこつかななどいへる、詞づかひをかしきさまにきこゆるを、すゑの、おなじ心といへるほど、たらぬ心地すれば、持と申すべし。

【通釈】

八番 左勝持（新校群書類従）

通能朝臣

七二秋ごとに、今宵ほどの（明るく澄む）月の光を見得るなら、目新しくもない光とも言えるだろうが。

右

有房

三月（をめでる心）のため、特に（月を隠す）山の端のあるのを嘆くのだ、——月を待つにせよ惜しむにせよ、同じ気持ちで。

左の歌は、今宵の月をめでる心は面白くも思いますが、上の句に「影を見は」と言つて、下の句に「光ならまし」と言っているのは、「影」と「光」といった同じ事を二箇所に置かれた（欠点をもつ）詠み様かと思う。右の歌は、「山の端をのみかこつかな」などと言っているのは、言葉遣いの面白い詠み様と思われるが、歌の末尾で「同じ心に」と言つたあたりは、言い足りない感があるので、持と判定しましょう。

【注】○山の端 やまのは。稜線。○まつもをしむもおなじころに月の出を待つ場合も、月の入るのを惜しむ場合も、同じ心で。月の出を待つ場合の山の端に対する心情は、例えば「山のはを出でがてにする月待つとねぬ夜のいたくふけにけるかな」（『新古今集』一五〇一、藤原為時）などの歌に見られる。また月の入るのを惜しむ場合の山の端に対する心情は、「あかなくにまだきも月の隠るるか山のはにげて入れずもあらなむ」（『古今集』八八四、在原業平）などの歌に見られる。後の歌は寓意のある歌のようであるが、ともに月を見るのを妨げる存在としての山の端に対する一般的な心情を示していると思われる。○首句 初めの句。

ここでは歌の上の句。○卒章 詩の終わりの部分を言う語だが、ここでは前の「首句」に対して歌の下句。

【考察】左の歌は、今夜ほどの月影がもし秋ごとに見られるものなら、それは「めづらしげなき光」と言えようが、と詠んでいる。当夜の月影を比類ないものとして賞美する心に基づいた作であろう。ただ、仮想によつて詠むことで形式的な変化はついても、内容は平凡なことを述べたにとどまると言えるかもしれない。

右の歌は、月に引かれるために月を隠す山の端の存在を嘆くので、それは月の出を待つ時も月の入るのを惜しむ時も同様の心だ、と詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌は月を賞する「心はをかし」とするが、「かげ」と「光」が同義語で重複する点を歌病に言う同心病として指摘する。右歌に對しては「山のはをのみかこつかな」と詠んだのを「詞づかひをかしきさま」と評するが、最後の「同じ心に」を表現が不十分と見たよううで、持と判定している。

勝負付は『新編国歌大観』も『平安朝歌合大成』も左勝とするが、これは依拠した本文自体の誤りと思われる。判詞によれば、持とあるべきである。

九番 左持

季経朝臣

七三うき雲のたちやはいづるて月あたりをはらふよはのけしきに

右

隆信

七四雲はらふ風にあはれをさきだてて空行く月の影のさやけさ

左の、月のあたりをはらふこと、ちかく木工頭俊頼の、吹く風にあたる雲をはらせてひとりもあゆむ夜半の月かな、といへる心にやあらん。右は、風にあはれをさきだててといへる、すゑはましてあはれもいかにとおしはかるるを、ただ、かげのさやけさとしてたるや、おもはずなる心ちやすらん。右はすゑよわし。左はことふりたるにや。仍又為し持。

【通釈】

九番 左持

季経朝臣

七三浮き雲がかかるわけもない、——照る月の、辺りに（雲を）近寄せない深夜のたたずまいに。

右

隆信

七四雲を吹き払う風で、まずあわれと思わせておいて、空を渡る月の、澄んだ清らかな光よ。

左の歌に詠まれた「月のあたりを払ふ」ことは、近いころに木工頭俊頼の「吹く風にあたりの雲を払はせてひとりもあゆむ夜半の月かな」と詠んだ歌の心であろうか。右の歌は、「風にあはれを先だてて」と詠んでいる点、下の句（に詠まれる月）は、ましてどんなにあわれの深いことかと推量されるのに、単に「影のさやけさ」と言つて終っているのは、心外に感じられることかと思う。（要するに）右の歌は下の句が劣っている。左の歌は詠み古されたことに属するかと思う。そのため、これも持とする。

【注】○うき雲のたちやはいづる 浮き雲がかかることはない。「たちいづ」は、立ち現れる意。「やは」は反語を示す。○あたりをはらふ 近くに寄せつけない。○よは 夜半。○あはれをさきだてて あわれを先に立てて。あわれとまず感じさせて。○木工頭俊頼 源俊頼。大納言経信の三男。木工頭で退官。歌人としては堀河院歌壇で活躍、のち白河法皇の命により『金葉集』の撰者となる。家集に『散木奇歌集』、歌論書に『俊頼髓脳』がある。一〇五五——一二九。○吹く風にあたりの雲をはらはせて…… 源俊頼の歌。内閣文庫本本来の形は、第二句「あたりの空を」。『散木奇歌集』（四九七）には「翫明月」の題詞で、第二句「あたりの空を」とある。（書陵部本を底本とする『新編国歌大観』による。）○ことふりたる 言い古されている。

【考察】左右の二首は共に雲を払った夜空にかかる月を歌っているが、左の歌は、夜半の月の「あたりを払ふ」たたずまいに雲もないと詠む。俊成の判詞に言うように、俊頼の、

吹く風にあたり空を払はせてひとりもあゆむ夜半の月かな（『散木奇歌集』四九七）

の歌に通じるところが目立つ。右の歌は、「雲払ふ風」にまずあわれと感じさせて「空行く月」の「影のさやけさ」と詠む。これも俊頼の歌に通じる点がないが、左歌に比べると、より新しい発想が見られるようである。

俊成の判詞は、左歌については、俊頼の歌に心が通じる点を指摘し、「事占りたる」作と批判している。右歌については、上句に「風にあはれを先立てて」と言ったからには下句に月の「あはれ」が詠まれるべきだが、そうやっていないのが心外で、「末よわし」と批判し、左右共に弱点をもつて持としている。

十番 左持

資隆

七五すみのぼる月しやどれば難波がたみちくる塩もつららぬにけり

右

顕昭

七六夜もすがら行きちがひてやすみぬらんころは空に月は心に

左の歌、難とすべきところなく、歌合のうたと見えたり。右歌、心すがたいとをかし。但、夜もすがら行きちがはんほど、しづかならぬ心ちやすらん。そもそも此たびの歌に、おほくちがふといふことの見えはれば、もし此比の歌のをかしきことばなどにやあらんそれをもしらず、かやうに申すにやとあやしく。しもの句の、心は空に月は心といへるも、すこし心みだるる心ちぞすれど、たがひにすめるほど、なほこれはをかし。かれは心うるはし。よいてこれもちと申すべし。

【通釈】

十番 左持

資隆

七五澄んで昇る月の光が映るので、難波潟に満ちてくる潮も、氷が張りつめたと見える。

右

顕昭

七六夜通し、行き違つて（澄んで）いたことになるだろうか、——心は（月に引かれて）空に行き、月は心に入つて。

左の歌は、非の打ち所がなく、歌合の歌としてふさわしい作と見られる。右の歌は、その心や姿が大層面白い。ただし、「夜もすがら行き違」うという様子は、落ち着かない感じがするだろうかと思う。一体今度の歌合の歌には、多く「ちがふ」という言葉が見えますから、この言葉はあるいは近ごろの歌で面白がる流行語の類でもあろうか。それも知らず、このように申すことかと、おほつかなくも思いますが。下の句の、「心は空に月は心に」と詠んだのも、少し心が乱れた感じがするが、心と月とが互いに入れ違つて宿っている様子を詠んだ点で、やはりこの右歌は面白い。対する左歌は心が整つて格調が感じられる。そのため、これも持と判定しましょう。

【注】○すみのぼる 月三番「注」参照。○難波がた 難波潟。摂津の国の歌枕。今の大阪市付近一帯にあつた潟。○つららぬにけり 氷が張つた（と見えた）。「つらら」が当時板状の氷を意味したことは、例えば『散木奇歌集』（六五二）の、「氷満池上」といへるを「の詞書の「けふよりはみはらの池につららぬてあぢのむら鳥ひまもとむらん」の歌などでも知られる。○すみぬらん 「すみ」は「住み」に「澄み」を掛けた表現であろう。○ころは空に月は心に 心は（月に引かれて）空に行き、月は心に入つて。先行歌に基づくと見え方と思われる。その先行歌は「考察」に挙げる。○歌合のうた 月四番「注」参照。

【考察】左の歌は、澄んで昇る月の光を移して満ち潮の難波潟が氷が張りつめたと見える様子を詠む。叙景歌として整った作であろう。

右の歌は左と作風が異なり、月を賞する場合の心と月の関係を、夜通し「行きちがひてやすみぬらん」と推量し、「行きちが」うのは、「心は空に」行き「月は心に」入るためとする。これは先行歌に詠まれた心と月の関係を用いたかと思われる。「心は空に」とは、例えば次のような歌に詠まれた、心が月に引かれて空に行く状態を言つたのであろう。

雲の上のこよひの月にさそはれて空になり行くわが心かな（大治五

年『殿上蔵人歌合』五、盛定

すみのぼる月のひかりにさそはれて雲の上までゆく心かな(『詞花集』

二九三、藤原実行)

また「月は心に」とは、例えば次のような歌に詠まれた、月が心に深く
とまる意味での「心に入る」ことを言ったのであろう。

山のはも名のみなりけり見る人の心にぞ入る秋の夜の月(『大式三位
集』一一、『後拾遺集』三九一では第五句「冬の夜の月」)

秋の夜の月は心に入りけり山のはとのみなに思ひけん(久安五年
『右衛門督家歌合』四、藤原重家)

右歌はこういう先行作によつて、「心は空に」行き、一方「月は心に」入
るとし、したがって心と月は「行きちがひてやすみぬらん」と詠んだも
のであろう。実際に月を見る人の心としては不自然とも思われるが、観
念上の遊びのような作なのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、非の打ち所のない「歌合の歌」と高
く評価しているが、右歌については、「心姿いとをかし」と言いながら批
判も加えている。すなわち上句に心と月が「夜もすがら行き違ひて」と
詠んだのを、「しづかならぬ心ち」がすると指摘する。また下句に「心は
空に月は心に」と詠んだのを、「少し心乱るる心ち」がすると指摘する。
これらの指摘は、右歌の歌境が落ちつかぬものである点を批判したので
あろう。

しかし俊成は結局、右歌の特長としての「をかし」の面をとり上げて、
左歌の特長の「心うるはし」と対置し、持と判定している。

十一番 左持

セ七今夜こそ雲のへだてはのけてけれみせの大成空は月のすみどころとて

右

頼保

寂念

セ八秋の夜はひかりをそへて玉かづらかづらきやまにすめる月かげ

左の、雲のへだてとりはらへらん空のけしき、はればれしからんと
きこゆ。右の、かづらき山の月は、よるともなむいへるふることと

おぼえて、こころもすみぬべくはべるを、これは、光をそへてとい
はんために、玉かづらとはおかれたるべしとはみゆれど、かづらき
山の葛藟くわいまづはれたらんまゆり樛木きうもくのしたの月にやと、いぶせき心地する
かたやあらん。ただし、歌のすがたこそなだらかに侍るめれ。又、
左はいかにも月あからんと思ゆれば、またもて持とす。

【通釈】

十一番 左持

セ七(十五夜の)今宵こそ、遮る雲は退けてしまった、——空は澄んだ月
の住む所として。

右

寂念

セ八秋の夜は、光を加えて、葛城山かつらぎの上に明るく澄んでいる月よ。

左の歌に詠まれた、遮る雲を取り払った空の様子は、晴れわたって
明るいことだろうと思ひやられる。右の歌に詠まれた葛城山の月は、
「葛城の神は」夜とも(ちぎらざらまし)と詠んだ古い歌の情景
と思われて、心も澄みわたりそうに感じます。ただ、この歌では、
「光をそへて」の語を生かすために、「玉かづら」の語を用いられた
のだろうとは思われるが、(そのためにまた)葛城山の葛くわいかづらの
まつわり付いた曲がり木の下に見る月かと、晴れ晴れしない感じが
する一面もあるうかと思う。しかし、歌の姿は滞らず詠まれている
ようです。一方、左歌はまことに月が明るい情景であろうと思われ
るので、またまた持とする。

【注】○玉かづら 本来は「玉」が美称で、つる性の植物を言う語である
が、ここでは枕詞として「かづらき」にかかる。○かづらきやま 葛城
山。大和の国の歌枕。今の奈良県西部、大阪府との境にある連山。○か
づらき山の月は、よるともなむいへるふることとおぼえて (右の
歌に詠まれた) 葛城山の月は、「夜とも」と詠んでいる古歌の情景と思わ
れて、の意であろう。その古歌は、『後拾遺集』の「八月十五夜によめる」
の詞書のある惟宗これみよとめ為経なみよとめの歌「いにしへの月かりせば葛城の神は夜とも
ちぎらざらまし」(二二六)であらう。これは、葛城山の一言主ひとことぬしの神が、

役の行者に吉野の金峰山との間に岩橋をかけることを命じられたが、自分の顔かたちを恥じ、夜間だけしか働かなかったという伝説による歌で、もしもその昔、今宵のような明るい月が空に懸かっていたなら、葛城山の神は夜に働こうなどと約束しなかっただろうに、との歌意。○葛城くずかづら。葛（マメ科の多年生つる草）の異名。「葛城」の語は古代中国以来使われ、「葛」は、かずら。○樛木 まがりき。『色葉字類抄』に「樛 マカリキ」とある。枝の曲がつて垂れてゐる木。「樛木」の語は古代中国以来使われ、「樛」は曲がる、木の枝が下曲する意。

【考察】左の歌は、月が雲を退け空を独占して澄みわたる様子を詠む。右の歌は、月が秋は光を加えて葛城山の上に澄む様子を詠む。

俊成は判詞で、左歌の情景を「はればれしからん」と言い、右歌の月を「心も澄みぬべく」と言っている。

右歌の葛城山の月について「夜ともなむ言へる古言とおぼえて」と記すのは、「注」で考えておいたが、『後拾遺集』の葛城山の月の歌、いにしへの月かかりせば葛城の神は夜ともちぎらざらまし（二六一、

惟宗為経

を念頭に置いて、昼のように明るく澄む光が感じられることを言ったのであろう。ただ問題点として「玉かづら」の語を用いた点を挙げている。この語は「光をそへて」と言った縁で用いたのであろうが、「玉かづらかづらき山」と続けると「かづら」のイメージが強くなって、つる草のまつわり付く老木が連想され、その木の間に月と見ると、「いぶせき心地する」面がありはしないか、——そう俊成は指摘していると思われる。これはイメージに関する観点による右歌の批判であるが、音調に関する観点からは「歌の姿こそなだらかに侍るめれ」と評価する。そして結局また持と判定している。

十二番 左勝

七九はつはつに山のは出づる月見ればいかにかすべきいらんをしさを

右

西遊

生西

ハ○池水のそこに紅葉のちりしければやどれる月もあかきなりけり

左の、月の山の端いづるより、いかにかすべきいらんをしさをといへる、あまりさいぎりてやあらん。空にすむまもなほあはれにもめでたくもはれば、これは二山之間、谷底にて見たる心ちやすらん。右は、池水のそこにもみちのちりしければといへる、またいがが。みづにちりしく木葉は、池にも河にもうかぶ物なり。これは石などの心ちやすらん。又、月もあかきなりけりなども、おろかにきこゆるき歌にはときどきよめれど、なほかやうのことは、よく用意すべきことなり。左は、いづる月を見んに、いることのおぼえむも、などかはともおぼゆれば、左のかちとすべし。

【通釈】

十二番 左勝

西遊

七九わずかに山の端を出る月を見るにつけ、どうすればよいのかと思う、——この月の入る時の名残惜しさを。

右

生西

ハ○池水の底に紅葉が散りしくと、水に映った月も（紅葉のせいで）明るく見えることだ。

左の歌で、月が山の端を出る時から、「いかにかすべきいらん惜しさを」と詠んだのは、余りに先のことまで心配し過ぎた感があるのか。月は空に澄んでいる間も人の心をうち結構に思われるのですから、これは（月の出る山と入る山と）二つの山の間の谷底で（少しの間）月を見ている場合と思われようか。右の歌は、「池水の底に紅葉の散りしければ」と詠んでいるが、これもまた、いかがであろうか。水に散りしく木の葉は、池でも川でも水上に浮かぶものである。この底に沈む葉は石などと同様に思われようか。また「月もあかきなりけり」などと言ったのも、不十分な表現と思われる。古い歌には時々（そのように）詠んでいるが、やはりこういうことは、よく配慮すべきことである。（それに比べると）左の歌は、出る月を見る折に、その入ることが心に浮かぶのも、あり得ることだという風

にも思われるので、左の勝しようと思う。

【注】○はつはつに わずかに。○月もあかきなりけり 月も明るく見えた。歌で月に関して「あかき」と言う場合「明き」が普通である。ただ右歌では「紅葉の散りしけば」に続けて、水に映る「月もあかきなりけり」とあるので、月も「赤き」色に見えた意のようだけれども、壬生忠岑の歌「久方の月の桂も秋は猶もみぢすればや照りまさるらむ（古今集）一九四」では、水に映った月でなく月そのものを詠んだ場合だが、もみじによって月が明るさを増すことが詠まれている。『古今和歌六帖』に見える歌「流れくるもみぢの色のあかければ網代に氷魚の夜も見えけり」（二五二五）によると、もみじの色の「赤し」が「明し」に通じるものとして詠まれていると思われる。○さいぎりて 「さいぎる」は「先切る」の変化した語で、「さいぎる」の古い形。ここでは先のことまで心配し過ぎるとの意であろう。

【考察】左の歌は、山の端に出かかる月を見ると、やがてその沈む時の名残惜しさが耐えがたく思われる、との心を詠んでいる。右の歌は、池水の底に紅葉が散りしくと、水に宿る月も「あかく」見える、と詠んだ作であろう。

俊成の判詞は、左右の歌に対して共に問題点のみを挙げている。左の歌は「あまりさいぎりてやあらん」、先のことを気に掛け過ぎた発想とする。右の歌は、上句に「池水の底に紅葉の散りしけば」と詠んだのを、木の葉はまず水上に浮かぶはずだと言ひ、また下句に「月もあかきなりけり」と詠んだのも、「おろかにきこゆ」、不十分な表現とする。その上で二首を比較して、左歌のような月への思いもあり得ないわけではないとして、相対的に左を勝と判定している。

十三番 左

ハ一たちかへりあまの川なみあらへばやながるる月のくまなかるらむ

右勝

成仲宿禰

政平

ハ二いつもかくそらにありあけの月ならばあかであるよのものはおもはじ

左歌、なだらかに見ゆれど、あまのかは、ながるる月のなんどいへること、つねにいひながしてふりにたることによ。右歌はころありをかしくもはべるが、月は四維をめぐることこそあれ、いつもされば空にこそはとやおほゆる。されど南閭浮の空にとおもへるなべし。又、歌はさやうにこそわかち申すことなれば、などかはさもいはざらん。左めづらしげなければ、右の勝と見えたり。

【通釈】

十三番 左

成仲宿禰

ハ一繰り返し、天の川の波が洗うので、流れる月が曇りなく見えるのだから。

右勝

政平

ハ二いつもこの有明月のように空に月があれば、見飽きぬうちに月の入る夜の、物思いをすることもなからうに。

左の歌は、滞らず詠まれていると見えるけれど、「天の川」「流るる月の」などと言った言葉は、普通に詠み慣わして使い古した言葉であらうかと思う。右の歌は、思い入れが深く面白くとも見えませんが、月は大空の四方の隅々を回って行くけれども、いつもそれで空にあるだろうにと思われる点もあらうか。しかし一首は、我々人間の世界の上の空に（ある月）というつもりで詠んだのであらう。そして実際、歌ではそんな風に特定の方面だけをとり上げて詠むことになっていくから、そのように詠んでいけないわけではない。左の歌は目新しさがないので、右の歌の勝と考えられる。

【注】○たちかへり 繰り返し。○そらにありあけの月 空にある有明の月。「ありあけ」は掛けことば。○四維 四方の隅。○南閭浮「南閭浮提」の略で、仏語。宇宙の中心をなす須弥山をめぐる四大洲の一つで、人間の住む世界とされた。

【考察】左の歌は、天の川の波が繰り返し洗うために、そこを流れる月が曇りなく見えるのだろうか、と詠んでいる。見立ての趣向によった作である。「天の川」を「流るる月」というとらえ方は、歌に古くから用いら

れ、

天の河雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞ流るる（『古今集』八八二）

天の河しがらみかけてとどめなんあかず流るる月やよどむと（『後撰集』三二九）

などの例がある。左歌もこの見方を基本としたバリエーションの一つであらう。

右の歌は、いつもこの有明月のように空に月があつたら、夜まだ見飽きないのに月が沈んで物思いをすることもないのに、との心を詠んでいる。月をめで月の入るのを嘆く心を基調として、仮定の形をとり、掛けことばを用いて詠んだ作である。

俊成の判詞は、左歌については、「なだらかに」詠まれた点は評価するが、「天の川」を「流るる月」というとらえ方が詠み古されたものである点を批判する。右歌については、「心ありてをかし」思われる点を評価した上で、いつも月が空にあつたという仮定の是非に関して意見を記している。その意見は、月は「四維をめぐる」がいつも空にあるものだという異論を提出し、しかし作者は「南閭浮の空に」ある月を念頭に置いたようで、そういう歌い方は認められると結局肯定する。この辺の記述は少々ペダンチックで無用の論の感もあるが、六条家歌人の多い場に対応した態度とも思われる。判定は「左めづらしげなければ」ということで右の勝とする。

十四番 左勝

心 覚

ハ三さやけさはひるにかはらず秋の月あはれぞにたるものなかりける

右

俊 恵

ハ四かきくもるをりこそあらめ月かげははるるにつけてものぞかなしき

左歌、あはれぞにたるなんといへるすがた、いひしりてをかしきこゆ。ただし、さやけさはひるにかはらぬとよまれたる、ひるをさやけしとやは申すらん。このさやけしといふことば、古語にいへる

は、神樂のはじめよりおこれる事とぞ見えたる。群神の歌舞したまひし時、あはれ、あなおもしろ、あなさやけなんどうたひしことばなり。されば、ひるもいひつべきやうにはきこゆれど、さやけとは竹の葉の声なりとぞいへる。すずしげあるころなるべし。それより月のひかりなどをさやけしといひならはしきたれるなり。ひるは陽気なるがゆゑに、すさまじく心ほそきけしきなどはなきにやあらむ。右歌は、ことにおほつかなきところなども見えず、心すがたこれをもかしくは見ゆれど、左はすこしおほつかなきところはありながら、月やなほしづかにあきらかならんと見ゆるうへに、すゑの句などよろしく見えはべれば、左かつ。

【通釈】

十四番 左勝

心 覚

ハ三さやけさは昼と変わらない、——秋の月は、あわれ深いこと、たぐいがないと思う。

右

俊 恵

ハ四曇る折は心も沈むだろうけれど、月影は、晴れるにつけて物悲しく思われる。

左の歌は、「あはれぞ似たる（ものなかりける）」などと詠んだ歌の姿が、詠み方を心得た風で、面白く思われる。ただし、「さやけさは昼に変わらず」と詠まれているが、昼のことを「さやけし」と言うであろうか。この「さやけし」という言葉は、『古語拾遺』に記すところによると、神樂の始まつた時に起原をもつとされている。（天照大神が岩屋から出られて）神々が歌舞された時、「あはれ、あなおもしろ、あなさやけ」などと歌った折の言葉である。だから、昼も言つてよいようにも思われるが、「さやけ」とは竹の葉ずれの音を表していると言われる。清く澄んだ様子の感じられる意味合の語なのであろう。そこから月の光などを「さやけし」と言い習わしてきたのである。昼は陽の気に属するものだから、冷ややかで物寂しい様子などは本来含まれないだろうかと思う。右の歌は特に不審

な点なども見えず、歌の心や姿の面で、これも面白くは思われるが、左の歌は少し不審な点はあるものの、詠まれた月がひとしお静かで明るい感があるうかと思われる上に、下の句なども面白く見えますので、右が勝ると判定する。

【注】○さやけさ 清く澄んでいること。○をりこそあらめ 「こそあらめ」は、「こそ」と「あらめ」の間に入るべき状態を示す語を省略して、逆接の意で後に続く語法。ここでは、折は心も沈むだろうけれど、といった意に解してみた。同様の語法を用いた歌の例に、「つらからむ時こそあらめあぢきなく言はで心をくだくべしやは」(『重家集』一五七「忍恋十首」)などがある。○古語 ここでは『古語拾遺』を指す。斎部広成の書いた家伝で、八〇七年の成立。○あはれ、あなおもしろ、あなさやけ 『古語拾遺』に、天照大神が岩戸から出た時のことを、次のように記す。「当此之時、上天初晴、衆俱相見。面皆明白。伸し手歌舞、相与称曰、阿波礼、阿那於茂志呂、阿那多能志、阿那佐夜憩、飫憩。」○さやけとは竹の葉の声なり 上記『古語拾遺』の歌謡の「佐夜憩」の注に「竹葉之声也」とある。○陽気 易学で挙げる、相反する性質の陰陽二つの気の内、陽の気。積極的性質をもち、消極的性質の陰気に対する。

【考察】左の歌は、秋の月がさやけさは昼と変わらず、比類なくあわれに思われる、との心を詠む。右の歌は、月影は晴れるにつけて物悲しいという心を中心とした作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、下句「あはれぞ似たるものなかりける」と詠んだ姿を、「言ひしりてをかし」と評価する。ただ上句に秋の月の「さやけさ」は「昼にかはらず」と言ったのを問題にしている。『古語拾遺』なども引用して延べているが、要は「さやけさ」の語の清澄を主とする意味が「昼」と結びつきにくいことを指摘したものであろう。

対する右歌については、問題点もなく、心姿が「をかし」見えると評価する。しかし左右を比べて左の勝と判定している。その根拠に左歌は下句が「よろしく」見える点とともに、月の静かで明るい感がある点を挙げたのは、そこに月の歌の本意により近いものを俊成は受け取った

のであろう。

雪

一番 左

八五その原やふせやは雪にうづもれてありとばかりも見えぬはき木

右勝

八六庭のおもにふりつむ雪の上を見て今朝こそ人はまたれざりけれ

左歌、ふせ屋の雪、はき木見えなどいへること、つねに見ゆることにやあらん。右歌、こころはめづらしからねど、ふりつむ雪の上を見てなどいへるすがたをかしに見ゆ。右のかちと申すべし。

【通釈】

雪

一番 左

八五園原の、ふせ屋は雪にうづもれて、そこにあるとさえ見えない帯木よ。

右勝

八六庭の面に降り積もった雪の上(の美しい様子)を見て、今朝は(そこに足跡をつける)人を待つ気にはなれないのです。

左の歌は、ふせ屋の雪とか、帯木が見えないとか詠んでいるが、これは歌で常に詠まれることだろうかと思う。右の歌は、内容は別に目新しいものではないけれど、「降りつむ雪の上を見て」などと詠んだ歌の姿が面白く思われる。右の勝と言うべきでしょう。

【注】○その原やふせや 園原(そのはら)のふせ屋。「園原」は信濃の国の歌枕で、今の長野県の南西部、下伊那郡阿智村のあたり。岐阜県との境にある神坂峠の東側。「園原や」の「や」は、「の」の代わりに用いて詠嘆の意を添える間投助詞。「ふせや」は、『万葉集』などでは、地面に伏せたように軒の低い小さな家「伏せ屋」を言うが、平安時代以降の和歌では、主要道路の難所等に設けられた緊急用の宿泊施設「布施屋」を言う場合もかなり多い。「園原やふせ屋」と詠んだ歌は少なくないが、その源に当た

『新古今集』九九七、坂上是則。『左兵衛佐定文歌合』二八や『古今和歌

六帖』三〇一九等では第四句「ありとて行けど」である。なおその後「園原やふせ屋」で地名として意識されるようになったらしい。○ははき木 帚木。一般にはホウキギ（アカザ科の一年草、高さ一一・五メートル、円錐形に多くの小枝を出す）を言うが、和歌では専ら信濃の園原にあるとされる伝説上の木のことで、遠くからはほうきを立てたように見えるが、近寄ると見えなくなると言われる。前記「園原やふせ屋」におふる帚木の……の歌について、『俊頼髓脳』には次のように記す。

「信濃の国に、そのはらふせやといへる所あるに、そこに森あるを、よそにて見れば、庭はく帚に似たる木のこずゑの見ゆるが、近くよりて見れば、うせて、皆ときは木にてなむ見ゆると、いひ伝へたるを、このごろ見たる人に問へば、さる木も見えずとぞ申す。昔こそはさやうにありけめ」。顕昭の『袖中抄』（十九）にも同様の記事がある。

【考察】左の歌は、「注」に挙げたように、

園原やふせ屋におふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな（『新古今集』九九七、坂上是則。『左兵衛佐定文歌合』二八、『古今和歌六帖』三〇一九では第四句「ありとて行けど」）

を源とする歌の一つで、園原のふせ屋の帚木が雪にうづもれた様子を詠んでいる。これと類似する歌が、覚性法親王（一一二九—一一六九）の家集『出観集』に見える。

園原やふせ屋も雪にうづもれてありとは見えし帚木もなし（『出観集』

五九七）

ただ制作の先後関係は明らかでない。

右の歌は、朝の庭に降り積もった雪の美しさに、ここに足跡をつけて来る人待つ気にはなれないとの心を詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、園原のふせ屋とか、そのの帚木が見えないとか、すでに詠み古されたことを、題の雪に結びつけただけの作である点を批判している。

右歌についても、まず「心はめづらしからねど」と指摘する。これは

例えば、

まつ人のいまもきたらばいかげせんふままくをしき庭の雪かな（『和泉式部集』一七〇「庭の雪」）

の作に見られるように、似た発想の先行歌があることを念頭に置いた指摘であろう。しかし「降り積む雪の上を見て」などと詠んだ点を、「姿をかしく見ゆ」と評価して、勝と判定する。この表現は「降りつもりたる雪を見て」の類の言い方と比較すれば明らかのように。即物的であるとともに簡潔な言い方で、印象的な表現と思われ、そういう点を評価したのであろう。

二番

左持

別当

ハセますらをがはにふのこやのむねよわみいくへになりぬ雪のうはぶき

右

参川

ハハ雪ふれば草木もわかずおしなべてよにおもしろく花咲きにけり

左、はにふのこやなど、さるかたにきこゆ。むねよわみや、なだらかにしもきこえざらん。右、よにおもしろくなどいへる、まことにおもしろからんとはおぼえはべれど、持などにや侍らん。

【通釈】

一番

左持

別当

ハ七野山で働く男の、粗末な小屋の、棟の造りがおろそかなので、幾重に重なったことか、——雪の上葺きが。

右

参川

ハハ雪が降ると、草木も木も隔てなく一様に、大層面白く花が咲いたと見える。

左の歌は、「壇生の小屋」など、それらしく詠まれていると思う。（ただ「むねよわみ」という語句は、なだらかに聞こえないだろうと思う。右の歌は、「よにおもしろく」などと詠んでいて、まことに面白からうとは思われますが、判定すれば持というところでしょうか。

【注】〇ますらを 強い男の意を中心とする語で、『万葉集』では官吏について言うことが多いが、平安時代後期あたりの和歌では、農夫や獵師を言うようになった。『長秋詠藻』に例をとると、「ますらをは同じふもとを返しつづ春の山田に老いにけるかな」（一九）の場合は農夫、「ますらをはしか待つことのあればこそしげき歎もたへ忍ぶらめ」（二二八）の場合は獵師が意識されているであろう。〇はにふのこや 埴生の小屋。粗末な小屋。〇むねよわみ 棟の造りが不十分なので、の意であろう。〇雪のうはぶき 雪の上葺き。雪が屋根の上に、屋根を覆うように積もること。

【考察】左の歌は、農山村の「埴生の小屋」の屋根に積もる雪を「雪の上葺き」ととらえ、それが「幾重になりぬ」と詠んでいる。題材として新しい面をとり上げたところが見られるが、これは平安時代後期の田園趣味の傾向を反映するものであろう。

右の歌は、雪が降ると草木を覆い尽くして、「よにおもしろく花咲きにけり」と詠んでいる。この雪が降ったのを花が咲いたのに見立てる趣向は古くから用いられており、『古今集』の、

雪ふれば冬こもりせる草木も春にしられぬ花ぞさきける（三三三、紀貫之）

などをはじめ、その用例が多い。

俊成の判詞は、左歌については、「さる方にきこゆ」と一応評価するが、「むねよわみ」の句を「なだらかにしも聞こえざらん」と声調の面で批判する。右歌については、別に具体的な指摘はしていないが、左歌と同じ程度の作と見たようで持と判定する。右歌が従来の趣向の域を出ない点も考慮した結果であらう。

三番 左持

八九久方の天津みそらやはるならんはなちるとのみ見ゆるしら雪

右

九〇みちもなく雪ふりつもる古郷はもとこしこまもいかがとぞ見る

宰相中将

弁

左歌、雲のあなたは春にやあるらむといへる歌、思ひいでられてをかしく侍る。これは、春ならむといへることばの言ひおほせられぬやうにきこゆるにや。右、歌さまはいときよげに見ゆ。もとこしこまもいかがとぞ見るといへるぞ、心えずおもつたまふる。これは管仲が老馬の智もちゐたりしことをいふことなり。それは斉桓公征二孤竹二時、雪にあひて道をうしなひて、軍衆みなしることなかりしに、管仲老いたる馬をはなちて、それにしたがひて、みかへりたりしなり。されば、道もなく雪ふりたらむふる里に、むねともとこしこまはきたるべきなり。いかがとはおもふべくもなきことなり。これはただ、道みえねどもふる里はもとこしこまにまかせてぞくる、といへる歌ばかりにつきてよまれたるにこそ。その歌も本体はこのことをよめるなり。されば歌のほど同科なり。これも持と申すべし。

【通釈】

二番 左持

八九大空は春なのであろうか、——空から花が散るとしか見えず、白雪が降る。

右

弁

九〇道も見えず雪の降り積もる古里は、かつて来た馬も、（道が分かるか）どうかと思うのです。

左の歌は、「（冬ながら空より花の散りくるは）雲のあなたは春にやあるらん」と詠んだ歌が思い出されて、面白と思います。ただこれは、「春ならむ」と詠んだ言葉が十分に言い尽くされていないように思われるところがあるか。右の歌は、歌の様子はまことに美しく見える。ただ「もと来しこまもいかがとぞ見る」と詠んだのが、不審に思われます。これは管仲が老馬の知恵を借りた故事を言ったのである。それは斉の桓公が孤竹を征伐した時、大雪に遭つて道を見失い、軍勢一同脱出する道を知らなかった際に、管仲が老馬を放し、それに従つて行くことで全員帰還した故事である。そのような故事による以上、道も見えず雪が降った古里にも、専ら以前来た馬

は迷わず来ると見るべきである。道が分かるかどうかとは思わずがないことである。これはただ、「道みえねどもふる里はもとこしこまにまかせてぞくる」と詠んだ歌だけによつて詠まれたのである。しかしその歌も根本はこの故事を詠んだものである。そんな次第で左右の歌の程度は同等と見られる。これも持と判定しよう。

【注】○久方の天津みそら 「久方の」は枕詞。「天つみそら」は大空。『万葉集』に用例がある。○古郷 ふるさと。ここでは、昔なじみの土地の意であろう。○雲のあなたは春にやあるらむといへる歌 『古今集』の清原深養父の歌「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらん」(三三〇)○管仲 古代中国の春秋時代の斉の宰相。桓公に仕え、富国強兵の策を推進した。○老馬の智もちるたりしこと 『韓非子』説林に見える故事。「管仲隰朋從_二於桓公_一伐_二孤竹_一。春往冬反、迷惑失_レ道。管仲曰、老馬之智可_レ用也。乃放_二老馬_一而隨_レ之。遂得_レ道。」○みかへりたりしなり 意味不明。『平安朝歌合大成』に「みかへり」は「みなかへりノな脱力」とするのに従いたい。○道みえねどもふる里はもとこしこまにまかせてぞくる、といへる歌 『後撰集』よみ人しらずの歌に「夕やみは道も見えねどふる里はもとこし駒にまかせてぞくる」(九七八)とある。『大和物語』五十六段では平兼盛の歌として「夕されば道も見えねどふるさととはもとこしこまにまかせてぞゆく」と見える。【考察】左の歌は、空は春なのだろうか、空から花が散ると見えて白雪が降ると詠む。これは俊成の指摘するように、清原深養父の歌、冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらん(『古今集』三三〇)と発想が類似する。それによつた作であろう。

右の歌は、道も見えぬまで雪の降り積もつた古里は、以前来た馬も道が分かるかどうかおぼつかないと詠む。これも俊成の指摘するように、夕やみは道も見えねどふる里はもとこし駒にまかせてぞくる(『後撰集』九七八、『大和物語』五十六段では第一句「夕されば」、第五句「まかせてぞゆく」)

によるところが大きいであろう。なお、上句については、

山里は雪ふりつみて道もなし今日こむ人をあはれとは見む(『拾遺集』二五二)

の上句から影響を受けているかもしれない。

俊成の判詞は、左歌については、深養父の歌が思い浮かべられて「をかしく侍る」と評する一方、「春ならむ」が「言ひおほせられぬ」ようだと批判する。これはどういう意味での批判であろうか。「春ならむ」という言葉自体は、深養父の歌の「春にやあるらん」に比べて特に不十分な表現とは考えにくい。とすると、深養父の歌では「空より花の散りくる」と詠んでいるのと比べて、左歌は「空より」と言わず単に白雪が「花散る」と見えるとするので、空は春だろうという推量の根拠が十分示されない批判したのであろうか。

右歌については、「歌さまはいときよげに見ゆ」と評価する一方、「もと来しこまもいかがとぞ見る」を問題視する。これは「老馬の智」の故事によつて詠んだ以上、故事に反することは詠むべきでないと批判したのであろう。

四番 左勝

左大弁

九一いかにせん冬木もいまだこらなくにふかくも雪のなりまさるかな

右

右京大夫

九二いかばかりさびしからまし雪ふかき大はら山のけぶりたらずは

左右ともにさせるとがなくは見ゆるに、左は、ふかくも雪のなどい

へるほど、いひしりて、いますこしはまさりはべりなん。

【通釈】

四番 左勝

左大弁

九一どうしよう、(薪にする)冬の木もまだ切らないのに、深く雪が、次第に積もつてゆくことだ。

第に積もつてゆくことだ。

右

右京大夫

九二どれほど寂しいことだろう、——雪の深く積もつた大原山に、(人の

暮らすしるしの煙が立ち昇らなかつたら。

左右ともにさほどの欠点はないと見えるが、左の歌は、「深くも雪の」などと詠んでいるあたりが、詠み方を心得た風で、（右歌に比べると）多少は勝っているでしょう。

【注】○大はら山 大原山。山城の国の歌枕。今の京都市左京区大原の周辺の山。また西京区大原野の小塩山辺りも言った。しかし平安時代中期以降の和歌では洛北の大原の山を言う場合が多い。隠れ住む所、炭を焼く所などとして詠まれる。

【考察】一首は共に雪の山里の様子をとり上げるが、左の歌は、薪にする木を切らないうちに「深くも雪のなりまさる」のを嘆いている。山里に暮らす者の心になつての作である。

右の歌は、「雪ふかき大原山」に煙が立ち昇らなければどんなに寂しいことだろうと詠む。この煙は、和泉式部の大原山を詠んだ歌、

見たせば真木の炭やくけをぬるみ大原山の雪のむらぎえ（『和泉式部集』七二、『後拾遺集』四一四では第一句「こりつめて」）

などを参照すると、炭を焼く煙であらうか。雪の深い大原山に人の暮らすしるしを見て、寂しさがわずかに慰められるとの心であらう。

俊成の判詞は、左右ともに「させることがなく」見えると言った上で、左歌の下句の詠み方を「言ひしりて」と評価し、左が少しは勝るだろうと判定している。

五番

左持

重家朝臣

九三しら雪のふりぬる時ぞはなさかぬときはの山ははると見えける

右

頼政

九四雪つもるこしの山風吹きぬらしひばら松の葉あらはれて見ゆ

左歌、をかしくは侍めり。ただし、ときはの山の雪を花にまがへてのちや、春と見ゆともいはん。みなしろたへに雪ふれらんやまを春と見むこと、さすがにいかが。また、もみぢせぬときはの山は吹く風のなどいへるは、いみじくきこゆるを、花さかぬときはの山もよ

ろしからずきこゆるにや。右歌、こしのやまかぜ吹きぬらしなどいへるほど、いひなれてきこゆるを、ひばら松の葉といへる、すこしかぞへたてたるこちやすらん。されど、かかるふるきすがたもあれば、左もいささかおほつかなきかたはあれど、歌のさまをかしければ、持と可レ申。

【通釈】

五番

左持

重家朝臣

九三白雪の降つた時は、花の咲かない常磐の山も（雪の花が咲いて、春が来たと見えた。

右

頼政

九四雪の積もる越の山風が吹いたらしい、檜原に松の葉が（白雪の中から）現れて見える。

左の歌は、面白く詠まれてはいるようです。ただし、ときわの山はその雪が花と見まがうことを言つて後に、春と見えると言うのがよからうかと思う。すべてが白く雪に包まれている山を春景色と見るようなことは、さすがにどうかという気がする。また、「もみぢせぬときはの山は吹く風の」などと詠んだ歌は、優れたものに思われるが、ここで「花咲かぬときはの山」と詠んでいる点も、感心しないように思われる。右の歌は、「こしの山風吹きぬらし」などと詠んだあたりは、詠み慣れたものと思われるが、「ひばら松の葉」と言つたのは、少々並べて挙げたような感じがするかと思う。しかし、古くはこういう表現の仕方もあるであらう。左の歌も多少不審な面はあるが、歌の様子が面白いので、持と判定しましょう。

【注】○ときはの山 常磐の山。常緑の木の茂る山。また山城の国の歌枕の常盤山のことで、今の京都市右京区にあった丘を言うとも見られるが、その場合も常緑のイメージを伴って歌に詠まれるのが一般である。○こし 越。北陸地方の古称。月五番の「注」参照。○ひばら 檜原。ヒノキの林。またヒノキの茂る原。ただし、そういう所として『万葉集』では今の奈良県桜井市のあたり、三輪・巻向・初瀬一带が限定的に歌わ

れ、平安時代以降の歌でもそれらの地の歌枕とされることが多い。しかし平安時代末ごろからは、それらの土地に限らず歌に詠むようになっており、右歌の場合などもそうであろう。なお、右歌のように「檜原」に「松」を併せて詠んだ早い例に、『万葉集』の「巻向の檜原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る」(二三一八)がある。〇もみぢせぬときはの山は吹く風の 下句「音にや秋を聞きわたるらむ」の形で、『古今集』(二五二)に紀淑望の作として見える。

【考察】左の歌は、白雪が積もると、花の咲かない常磐木の山も春景色に見えた、と詠む。雪を花に見立てる趣向によった作である。

右の歌は、雪の越の地で、山風が吹いたらしく、檜原に松の葉が現れて見える、と詠む。一面の白雪の中に松の緑が際立って見える風景を歌った作である。

俊成の判詞は、左歌については「をかしく」詠まれていると一応評価する一方、二つの問題点を挙げている。その一つは、雪でときわの山が春と見えたと言ふ点で、これは無理があり、雪が花と見えたことを加えるのがよいと言ふ。今一つは、「花咲かぬときはの山」と詠んだ点で、『古今集』の紀淑望の歌の「紅葉せぬときはの山」はよいが、これは「よろしからず」思われると言ふ。この点は、雪十番の判詞を参照すると、俊成は特にときわの松を長く栄える生命力の象徴と見る伝統的な観点から、「紅葉せぬ」と秋の訪れによる衰えを否定するのはよいが、「花咲かぬ」と生命力のあふれる春との関係を否定するような詠み方をするのは不適當と見たと思われる。

右歌については、「越の山風吹きぬらし」あたりの詠み方に「言ひなれた表現力を認めているが、「ひばら松の葉」は「かぞへたてたる」言い方とも思われると言ふ。これは「ひばら」と「松の葉」を並列的に挙げたように見える点を指摘したのであろう。

六番 左持

経盛朝臣

九五すみよしの浜まつがえにふる雪をしらゆふかくとおもひけるかな

右

師光

九六をざさはらのまの雪にうづもれてゐなの山風おとぞとしき

左、住よしの松、しらゆふかくなどいへることば、ききなれた心地すれども、はまの松がえにふる雪をなどいへるすがた、をかしくみゆ。右の、ゐなのさはらゆきにうづもるなど、これもまたつねのことなるを、おとぞとしきなどいへるほど、又心ありてきこゆれば、これも持とす。

【通釈】

六番 左持

経盛朝臣

九五住吉の、浜松の枝に降った雪を、(神にささげる) 白木綿を掛けたと思いました。

右

師光

九六猪名の笹原は、夜の間に降った雪にうづもれて、山から吹く風の音も少ない。

左の歌は、「住吉の松」「白木綿掛く」などと詠んでいる言葉が、聞き慣れたという気がするけれども、「浜松が枝に降る雪を」などと詠んでいる歌の姿は、面白く思われる。右の歌で、猪名の笹原が雪にうづもれるなどと言ふのもまた、通常使われる表現であるが、「音ぞとしき」などと詠んだあたりは、やはり思い入れの深いものと思われるので、これも持と判定する。

【注】〇すみよし 住吉。摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区のあたり。海辺の地で、住吉大社がある。〇しらゆふかく 白木綿掛く。「白木綿」は、白い木綿で、楮の樹皮をさらして白いひも状にしたもの。楮の枝などに掛けて神前にささげるのに用いた。〇をざさはら を笹原。「を」は語調を和らげる接頭語。〇ゐな 猪名。「猪名野」「猪名の笹原」として摂津の国の歌枕。今の兵庫県川西市・伊丹市・尼崎市などの地を流れる猪名川流域の野。〇おとぞとしき 音ぞ乏しき。音も少ない。

【考察】左の歌は、住吉の浜の松に降った白雪を神前の白木綿と思つたと詠む。ただ、これと似たところのある歌は、俊成の言うとおり少なくな

い。特に、

すみよしの浜松がえに風ふけば波のしらゆふかけぬまぞなき（『新古今集』一九一三、藤原道経「一品聡子内親王、住吉にまうでて、人々歌よみ侍けるによめる」）

の一首は、雪でなく波を歌う点は異なるが、語句や発想がかなりよく似ている。詠作時期は左歌より早い。

右の歌は、猪名の笹原が雪にうずもれて山風の音が乏しいと詠む。これは有名な、

有馬山猪名の笹原風ふけばいでそよ人を忘れやはする（『後拾遺集』

七〇九、大貳三位）

の歌によって、その笹原が雪にうずもれた時の様子を歌ったものであるう。

俊成の判詞は、左歌については、「聞きなれたる心地」がする言葉が使われている点を批判する一方、「浜松がえに降る雪を」などと詠んでいるのを、「姿、をかしく見ゆ」と評価している。

右歌についても、「常のこと」と思われる面があるのを批判する一方で、「音ぞとしき」などと詠んだのを「心ありてきこゆ」と評価する。これは猪名の笹原が雪にうずもれ、山風が吹いても音を立てなくなった様子まで、思い入れて詠んだ点を評価したのであろう。

なお右歌の「猪名の笹原雪にうづもる」などを「常のこと」と言うが、このように詠んだ歌は今日多くは見いだしにくい。その中で、

ふる雪にゐなのささ原うづもれて風にそよめく音もきこえず（公重

『風情集』二二〇）

の一首は右歌とよく似ている。ただ制作の前後関係は明らかでない。

七番 左持

九七霜がれのをばなも雪のふりつめばまねくかたなくうづもれにけり

右

九八雪つもるせたのながはし見わたせばただ白たまをしけるなりけり

頼輔

公重朝臣

左、雪ふりつめらむをばな、まことになにかは見えわかも。右のせたの長橋の雪はをかしくも見わたされなんとは思つたまふる。また玉のしき所、思ひかけぬ心ちやすらん。庭などこそ常のことなれば、ほりえには玉しかましをなどいへることもあれ。いづこにもなかはしかざらん。ただし、歌のほどおなじしに見ゆ。よりて又持と申すべし。

【通釈】

七番 左持

公重朝臣

九七霜枯れの尾花は、雪が降りつもと、その手招きする姿も消えてうずもれてしまった。

右

頼輔

九八雪のつもった瀬田の長橋を見渡すと、さながら白玉を敷き連ねたと見えた。

左の歌の、雪の降りつもった尾花は、まことに見分けようもなからう。右の歌の、瀬田の長橋の雪は、面白く見渡されたくと思うます。また玉を敷いた所が、意外な感じを与えるだろうかと思う。庭など（に玉を敷くと詠むこと）は普通のことだ。だから、「堀江には玉敷かまし」と詠んだ歌もあるのだ。どこでも玉を敷くと言うのにふさわしい所があるはずだ。ただし、（左右とも）歌の程度は同等に見える。そこでこれも持と判定しましょう。

【注】○をばな 尾花。ススキの花穂。その風に揺れる様子は、手招きする姿に似ているところから、下句に見えるように「まねく」と擬人的に表現される。○せたのながはし 瀬田（勢多・勢田）の長橋。近江の国の歌枕。今の滋賀県大津市の瀬田川にかかる橋。○白たま 白色の美しい玉。特に真珠を言う。○ほりえには玉しかましを 「堀江には玉敷かましをみ船漕がむとかねて知りせば」（『万葉集』四〇八〇、橘諸兄）。元正天皇が難波の宮に滞在した時の、左大臣橘諸兄の歌。難波の堀江は、今の大阪市の上町台地の北側にあって大阪湾に通じていた堀。

【考察】左の歌は、尾花の手招きするように揺れる姿も、雪が降りつもる

と見えなくなつた、と詠む。秋の尾花の人を招くような姿は、

花すきまそほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつるかな（『散木奇歌集』四一七）

などと詠まれるが、左歌はさらに季節が移り霜枯れた白い尾花が、降りつもった雪の中にその招くような姿を消した様子（左）を歌う。

右の歌は、雪の瀬田の長橋の様子を「白玉を敷ける」と見えたと詠んでいる。視覚的に鮮明なイメージをもたらし作であろう。

俊成の判詞も、この点に触れるところが多い。「玉のしき所」を瀬田の橋としたことを「思ひかけぬ心ちやすらん」、意外な感じがするだろうと言うが、これは否定的な意味での批評でないことは、その後続く言葉から知られる。「堀江には玉敷かましを」（『万葉集』四〇八〇）と詠んだ古歌の例を引いて、適当な所なら玉を敷くと詠んでよい、という見解を示している。判定は、左右の歌の程度を同等と見て持とする。

八番 左勝

通能朝臣

九九高砂のをのへも雪にうづもれてみちたえぬらんしがの山越

右

有房

「〇ねぬる夜はむべさえけらし朝戸あけて見ればみゆきの庭にみちたる左歌、すがたことばをかしきこゆ。ただし、あき冬なども、しがよりゆきかふものをば、しがの山こえすところそは申すらめ、うちまかせては、はるの花ざかりなどにこそは、しがの山越とて、いにしへもをかしきことにはしけれ。このことぞいかがおぼつかなく右歌、偏効三万葉之歌風、頗背中古之妙体也。かかるかたにてはさても侍りぬべけれど、左おぼつかなき所ありながら、みちたえぬらんなどいへるすかた、にはみちたるのことはにまざりてや。」

【通釈】

八番 左勝

通能朝臣

九九山の峰も雪にうづもれており、志賀の山越えの道は、絶えてしまったことであろう。

右

有房

「〇夜分寝た間、なるほど冷えたわけだ、——朝戸をあけて見ると、雪が庭一面に降っていた。」

左の歌は、その姿、言葉が面白く思われる。ただし、秋や冬などの季節でも、志賀を通じて（都と）行き来する者について、志賀の山越えをしようとしているであろうが、（歌に詠む場合）一般には、春の花盛りなどの時に、志賀の山越えと詠んで、昔も興趣のあることにしたのである。こういう点で（左歌は）どうなのかと不審に思われる。右の歌は、専ら万葉の歌風にならい、かなり中古の優れた風体とは異なるところがある。万葉風の歌としては相応の作と言ふべきでしょうけれど、左の歌は不審な点もある一方で、「道絶えぬらん」などと詠んだ歌の姿が、（右歌の）「庭にみちたる」と詠んだ言葉に比べると、まさっているかと思う。

【注】〇高砂のをのへ 高砂の尾上。山の峰。「高砂」は、砂の高く積み重なった所、すなわち山を意味するが、ここでは「高砂の」で「尾上」にかかる枕詞と見てよいであろう。「尾上」は「峰の上」から出た語で、山の頂を言い、さらに峰のことも言う。〇しがの山越 志賀の山越え。山城・近江の国の歌枕。今の京都市左京区の北白川から、山中峠付近を経て、大津市北部の志賀の里に至る山道。この語が歌に用いられたのは『後拾遺集』以後。〇朝戸 朝にあける戸。その古い用例は『日本書記』（二七、崇神天皇）、「万葉集」（一五八三ほか）に見える。〇偏効三万葉之歌風 偏に万葉の歌風に効ひ。専ら万葉集の歌風にならつて。〇頗背中古之妙体 頗る中古の妙体に背く。かなり中古の優れた風体に従わないところがある。「中古」は、俊成の『古采風体抄』によれば、『古今集』『後撰集』『拾遺集』などで代表される時代。

【考察】左の歌は、峰が雪にうづもれていることから、志賀の山越えの道は絶えたであろうと思ひやうた作である。右の歌は、朝に雪が庭一面に積もっているのを見て、昨夜冷えたのも道理と思つたと詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌については、「姿言葉をかしく」と評価する。ただ

「志賀の山越」をここで用いたことを問題点として挙げてゐる。これは、「志賀の山越」の語は、秋冬などに志賀と都を往来する場合も使われるだろうが、歌では普通春の花盛りなどに関して詠む伝統があると言っているから、歌枕として詠む場合の伝統の面から疑問視しているものと思われる。「志賀の山越」の語を用いた歌の早い例になるのは、『後拾遺集』の、

桜花道みえぬまで散りにけりいかはすべき志賀の山ごえ（一三七、橘成元）

であるが、この一首を初め「志賀の山越」は花一杯の情景として詠まれる場合が多い。それを雪で道も絶える山奥の場所のように詠むのは、イメージが違い過ぎる点を、問題にしたのであろう。

右歌については、万葉の歌風にならない、中古、三代集のころの歌風に背いていると指摘する。これは、右歌が『万葉集』の歌を思わせる簡素で古風な詠み方をしてゐる特徴をとらえたのであろう。「朝戸あけて」「み雪」などの用語も、平安時代の歌にも用例はあるが『万葉集』を印象づける言葉であつたと思われる。そして俊成は左歌の「道絶えぬらん」と右歌の「庭にみちたる」を対照的にとり上げ、前者がまさると評している。後者では表現が素朴過ぎると見たのであろうと思う。

九番 左持

季経朝臣

二〇くれ竹はそことも見えす雪ふればたえずをれふすおとばかりして

右

隆信

二〇三ふりそめてはなかと見せしその梢かくるほどぞゆきの日かすは

左、くれ竹雪にをるなどいふことは、つねにいひならはせることなれど、くれ竹はとさしておかれたるほどやいかが。なよたけなどこそ、さはあらめ。右、そのこずゑなどいへる、をかしきさまなるべし。すゑの句の、かくるるほどぞといへるわたり、いかに、いひきかせられねば、歌のほど持とや申すべからん。

【通釈】

九番

左持

季経朝臣

二〇呉竹は、そのありかも見えない、——雪が降ると、たえず折れ伏す音ばかりが聞こえて。

右

隆信

二〇三（雪が）降りをはじめて、花かと思えたその梢が、隠れるまでになつた、——雪の日数が積もつて。

左の歌は、（詠まれた）呉竹が雪で折れるなどということは、一般に詠みならわしていることだが、「呉竹は」と取り立てて言われたあたりは、いかがであらうか。なよ竹などなら、そう言つてもよからうが。右の歌は、「その梢」などと言っているのが、面白い詠みぶりであらう。（しかし）下の句で、「かくるるほどぞ（雪の日数は）」と詠んだあたりは、どうであらうか、十分に分かるように言われていないので、歌の程度としては持と言うべきでしようか。

【注】〇くれ竹 呉竹。中国から伝来した竹の意の名称で、ハチク（淡竹）の異名。葉は細くて多く付き、節が多い。〇なよたけ 細くしなやかな竹。〇いかに、いひきかせられねば 「いかに」の後の読点は、『新編国歌大観』や『平安朝歌合大成』にないのであるが、「いかに」を後へ続けるのはいかかと思われるので、読点で切り離して前に続けて解してみた。「言ひ聞かせられねば」も言い方にやや疑問があるが、仮に「通釈」のように解してみた。群書類従本や歌合部類版本では「言ひおほせられねば」の形で、これは意味がよく通じる。

【考察】左の歌は、雪が降ると竹のありかは見えないが、雪に折れ伏す音だけは聞こえると詠む。坂上明兼（一一四七年没）の歌、

くれ竹の折れふす音のなかりせば夜ぶかき雪をいかでしらまし（『千載集』四六四）

は、夜の雪の場合であるが、雪で呉竹の折れ伏す音に重点を置いた先行歌に属する。

右の歌は、雪の降り初めたころは花かと思えた木の梢が、雪の日が続

いて雪に隠れるまでになったと詠む。時間の経過を取り入れて詠んだ作である。

俊成の判詞は、左歌の問題点として、「くれ竹は」と、助詞「は」を用いて「くれ竹」を強調して提示した点を批判している。特に強調する必然性がない以上、「は」のない方が安らかに聞こえるとの指摘であろう。

右歌については、「その梢」などと詠んだのを「をかきさま」と評している。「その」は一見無用のようだが、このようにアクセントをつけて表現したのを、心のリズムも出て面白いと見たものかと思う。一方、下句の「かくるるほどぞ」と詠んだあたりの表現を不十分として問題視している。これは「かくるるほどぞ雪の日数は」と続く下句の表現が適切でないとしたのであろうか。

十番 左持

資隆

二〇三千年まではるをもしらぬ松がえにあだなる花を雪ぞかしける

右

顕昭

二〇四ふまばをしふまではゆかむかたもなしいかがはすべき野路のはつ雪
左歌は、よそのもみちを風ぞかしけるといへる歌を、あだなる花をとひきなされたる心、をかしくも侍り。かみの句ぞいかにぞやきこゆる。松むらをば、もみぢせず、秋をしらずなどいへるはよくきこゆ。はなこそさかざらめ、ちとせまではるをしらずといはん、いかかは。はるのはじめのはつねにも、こ松をこそはひくことなれば、はるをばしりてやあらん。されば、かの寛平の御時きさいのみやの歌合にも、ときはなる松のみどりもはるくればいまひとしほの色まさりけり、とこそ宗行朝臣よみて侍めれ。はじめつかたのつがひに、ときはの山の雪にかやうのこと侍るか。松のきをばなほいはひの物にておかまほしくて、たびたびかたぶき申すになん。右の歌、上句はちかくかやうのこと、ききし心地する。ひがおほえにや。すゑのくも、ことにすぐれてきこえねど、左おぼつかなきことどもあれば、また持とすべし。

【通釈】

十番 左持

資隆

二〇三千歳まで（緑の色を変えず）、春の訪れも知らぬ様子の松の枝に、仮初めの花を、雪が（降って）貸したことだ。

右

顕昭

二〇四踏むには惜しいし、踏まずには行くすべもない、——どうすればよろう、野道に降った初雪は。

左の歌は、「よその紅葉を風ぞかしける」と詠んだ歌に基づいて「あだなる花を（雪ぞかしける）」とされた心が、面白いとも思いますが。（ただし）上の句はどうだろうかと思われる。松林を「もみぢせず」「秋をしらず」などと詠んだのはよいと見られる。しかし、松に花は咲かないにしても、「千年まで春をしらず」と詠むのは、どうしてよいわけがあらうか。新春の初子の日にも、小松を引く習わしがあるから、松は春を知っているであらうと思う。そうであるから、あの寛平御時后宮歌合にも、「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」と宗子朝臣が詠んでいるようです。（この雪の題の）初めの方の番（五番）で、ときわの山の雪の歌にも、このような詠み方が見られたかと思えます。（しかし）松の木はやはり繁栄を祝うのにふさわしい物にしておきたい気持ちから、たびたび不審に思うことを記す次第です。右の歌は、上の句は近ごろこれと似た歌を聞いた気がする。私の記憶違いであらうか。下の句も特に優れていると思われないが、左の歌に不審なところがあるから、この番も持と判定しよう。

【注】〇千年まで 千年になるまで。松について言ったもので、松の寿命は千年とされる。『和漢朗詠集』にも「松樹千年終是朽」（二九一、白居易「檣」とある。（もとの詩は『白氏文集』卷十五「放言五首」の五に見える。）古歌でも『拾遺集』に、「千とせまで限れる松もけふよりは君に引かれて万代や経む」（二四、大中臣能宣）と詠まれている。〇あだなる花 仮初めの花。ここでは枝に付いた雪を花に見立てた。〇よそのも

みちを風ぞかしけるといへる歌「秋くれど色もかはらぬときは山よ
そのもみちを風ぞかしける」(『古今集』三六二)〇はつねにも、こ松を
こそはひく 初子の日にも、小松を根引きする。新年の初子の日に野に
出て小松を引き、若菜を摘み、健康と長寿を願う行事が、特に平安時代
中ごろから広く行われた。〇寛平の御時きさいのみやの歌合 寛平の
御時の後の宮の歌合。寛平五年(八九三年)九月二十五日以前に成立し
た歌合で、主催者は皇太夫人班子女王(光孝天皇の后)であるが、実質
的に推進したのはその子の宇多天皇と見られている。二百首の歌を百番
の歌合にしたのが原形であつたらしいが、現存する伝本には完本がない。
〇ときはなる松のみどりも……『寛平御時后宮歌合』(三九)に見え
る歌で、『古今集』(二四)に源宗子(ひんぎ)の作として収められる。宗子は光孝
天皇の孫で、三十六歌仙の一人。生年未詳、九三九年没。〇はじめつか
たのつがひに、ときは山の雪に 雪五番左歌に「しら雪のふりぬる時
ぞ花さかぬときは山は春と見えける」とあつたのを指す。

【考察】左の歌は、千歳まで色を変えず春の訪れも知らぬ様子の松の枝に、
仮初めの花を雪が貸して付けたと見える、と詠む。雪を花に見立て、松
に仮の花を雪が貸し与えたととらえた点に、趣向の眼目があると見られ
る。ただその「あだなる花を雪ぞかしける」という下句は、俊成が判詞
に挙げるように、

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみちを風ぞかしける(『古今
集』三六二)

の歌の下句の言い方によつたと思われる。

右の歌は、野路の初雪を「踏まば惜し踏までは行かむかたもなし」と
当惑する心を詠んだ点に、趣向の眼目を置いた作であろう。ただこの上
句は、俊成は「近くかやうのこと、聞きし心地する」と言っているが、

踏めば惜し踏までは行かむかたもなし心づくしの山桜かな(『千載集』
八三、赤染衛門)

の歌の上句とほとんど変わらない。この赤染衛門の一首は花の歌で、『赤
染衛門集』には、

踏めば惜し踏まらずは行かむかたもなし散りつむ庭の花桜かな(四二
五)
の形が見えるが、ともかく赤染衛門の歌の上句をほとんどそのまま右歌
は借用している。

俊成の判詞は、左右の歌がそういう先行歌によつた点に触れているが、
左歌の場合は、「ひきなされたる心、をかしくも侍り」と言っている。こ
れは花五番判詞に似た評語が見えるのも参照すると、先行歌の表現を新
しく生かして取り入れたと見て評価したと思われる。それに対して右歌
の場合は、判詞の文面に評価した形跡がない。先行歌の表現をほとんど
そのまま借用しているためであろう。

しかし俊成は、左歌は上句「千年まで春をもしらぬ松がえに」と、松
が「春をしらず」と詠んだ点を、妥当でないと批判している。すなわち、
樹齢の長い松はめでたいものとして、新春の初子の日に松を引く行事が
あり、また『寛平御時后宮歌合』にも、

ときはなる松のみどりも春くれれば今ひとしほの色まさりけり(三九)
と詠まれるから、松は春を知るものであり、繁栄を祝うのにふさわしい
ものとする伝統的な見方を重んじたいと俊成は言う。そういう立場から、
「春をもしらぬ」とか「花さかぬ」(雪五番左)とかの、松について春の
生命力との関連を否定するような詠み方は適当でないのである。

十一番 左勝

頼保

〇五ふる雪に谷のかよひぢまよふらし人こそ見えぬみやまべの里

右

寂念

〇六さらぬだにもよぎが宿はさびしきに雪ふみわけてたれかとふべき

左、谷のかよひ路まよふらしなどいへるすがたをかしきこゆ。
右も、ゆきふみわけてなどいへるほどは、いひしりてなだらかに見
ゆれど、左かみしものすがた、いひかなひて見ゆ。左勝なるべし。

【通釈】

十一番 左勝

頼保

（呈）降る雪のため、谷間の通路が見分けにくくなったらしい。山深い里は、人の姿も見えない。

右

寂念

（三）ただでさえ、よもぎの茂るあばら屋は寂しいのに、雪を踏み分けてだれが訪ねてこようか。

左の歌は、「谷の通ひ路まよふらし」などと詠んだ姿が大層面白く思われる。右の歌も、「雪ふみわけて」などと詠んだあたりは、心得た詠み方で、滞りなく歌われていると見えるが、左の歌の上の句と下の句の（対応した）姿は、実に巧みに表現していると見える。左の勝であろう。

【注】○さらぬだに ただでさえ。○よもぎが宿 ヨモギの生い茂る、荒れた住まい。○いひかなひて見ゆ 巧みに表現したと見える。

【考察】左の歌は、雪で谷間の道もうずもれたらしく、山里に人影も見えない、と詠む。右の歌は、ただでさえ蓬の茂る住まいは寂しいのに、積雪を踏み分けて来る人もない、と詠む。

俊成の判詞は、左歌の二・三句あたりを引いて「姿いとをかしきこゆ」と評し、また右歌も四句あたりを「言ひ知りてなだらかに見ゆ」と評するが、特に左歌を「上下の姿、言ひかなひて見ゆ」と評価して勝としている。一首全体の姿から見て、左歌の上句と下句とが程よく対応し、雪の山里の情景を効果的に表現している点を評価したのであろう。

十二番

左勝

西遊

（四）かきくらしこしのかたみちふる雪はいつわたやまをおもひこそやれ

右

生西

（五）よのつねは雲の衣をこしにまくたかまの山はゆきふりにけり

左 こしのかたみち、いつわた山など、なつかしきさまはきこえねど、またかかるかたにてはさてもありなん。右はいとめづらしくこそ見え侍れ。但、この山をば、よそにのみ見てややみなんかづらきやたかまの山のみねのしらくも、などのみこそききならへるを、是

は、くもの衣をこしにまくといへる、それよりかみおもひやられて、山のすがたもよろしからずやきこゆらん。かの、まがねふくきびの中山おびにせる、などいふやうなることのあるにや。よもゆゑなくはあらじを、え見およばぬことにて、おどろきおもつたまへるこそいとくちをしく。されど、こしにまくとは、なほすがたもいかがは。五綿山を勝と申すべし。

【通釈】

十二番

左勝

西遊

（六）ただて来た越への道中、空を暗くして降る雪に、いつまた帰れることかと心細く、いつわた山の辺りを思いやるのです。

右

生西

（七）いつもは、雲の衣を腰にまとっている、高間の山に、今は（全山白く色に）雪が降り積もっていた。

左の歌は、「越の片道」「いつわた山」などと詠んでいる点、心をひかれる様子には思われないが、またこういう方面を詠んだ歌としては、それでよいと見るべきなのであろう。右の歌は、大層珍しい詠み様に見えます。ただし、この高間の山については、「よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峰の白雲」などの歌は聞き慣れているが、右歌は「雲の衣を腰に巻く」と詠んでいるので、腰より上の様子が思いやられて、山の姿もよくないように思われもしようか。（あるいは一首は）あの「ま金ふく吉備の中山帯にせる（細谷川の音のさやけさ）」などの歌のようなことが詠まれているのだから。よもや根拠がないわけではあるまいが、（その根拠とすると）目に届かないでいるために、意外という感想をもったのですが、その点大層遺憾に思う次第です。けれども、「腰に巻く」というのは、やはり姿としてもいかがであらう。五綿山の歌の方を勝と判定しましょう。

【注】○かきくらし（空を）暗くして。「かき」は語調を強める接頭語。○こしのかたみち 越の片道。（都から）北陸地方への道の、往路が復

路かいずれか一方の道で、ここでは往路であろう。用例の少ない語であるが、『好忠集』の書陵部蔵伝藤原為相筆本（『日本古典文学大系 平安鎌倉私家集』に翻刻）に、「見わたせばこしのかたまち雪つもりいさ白山のほどはいづこぞ」（三二六）の歌が見える。（流布本系の本文によった『新編国歌大観』では、第二句「こしのたかねを」）〇いつわたやま「いつわた」は「五幡」のことであろう。越前の国、今の福井県の敦賀市の地名。『万葉集』に「かへるみの道行かむ日は伊都波多の坂に袖振れ我をし思はば」（四〇七九、大伴家持）と詠まれる。平安時代には、「君をのみいつはたと思ひこしなればゆきさきの道ははるけからじを」（『後撰集』一三三六、よみ人しらず）、「わすれなん世にも越路のかへる山いつはた人にあはむとすらん」（『新古今集』八五八、伊勢。『伊勢集』では本により語句の異同がある）など、「何時はた」を掛けて詠まれる。『枕草子』の「山は」の段に「いつはた山」と見え、『八雲御抄』では、巻五名所部の「坂」の項に「いつはたの」と見える一方、「山」の項に「いつはた山」として見える。〇雲の衣 雲を衣服に見立てて言う語。漢詩の「雲衣」に由来し、和歌では『万葉集』（二〇六七）以下に用例がある。〇たかまの山 高間の山。大和と河内の国境、今の奈良県と大阪府の境に南北に続く金剛山地（葛城山系）の最高峰、金剛山の古名。標高一二二五メートル。〇よそにのみ見てややみなんかつらきや…… 『和漢朗詠集』四〇九、「雲」の項の最後に見える歌で、作者不詳。のち『新古今集』九九〇、恋歌一の冒頭に「題しらず、よみ人しらず」として収められる。〇まがねふくきびの中山おびにせる 下句「細谷川の音のさやけさ」の形で『古今集』（一〇八二）に見える。左注に「この歌は、承和の御嘗の、吉備国の歌」とある。「まがねふく」は枕詞で、一首は、吉備の中山が帯を巻くように巡らせている細い谷川、細谷川の音が清く澄んで聞こえる、との大意であろう。

【考察】左の歌は、「越の片道」で空を暗くして降る雪に「いつわた山」を思いやる、と詠んでいる。「越の片道」は、用例の少ない語であるが、北陸地方への往路を言ったのであろう。「いつわた山」は、「注」でも触

れたが、五幡山のことと思われ、伊勢の歌にも、

わすれなん世にも越路のかへる山いつはた人にあはむとすらん（『新古今集』八五八の歌形による）

とあるように、「五幡」に「何時はた」を掛けて詠むことが一般に行われていたらしい。左歌も雪深い北陸への道をたどる立場で、いつまた都に帰れることかと心細く思う心を、五幡山に託したものであろう。

右の歌は、いつもは雲の衣を腰に巻いた高間の山が、雪に包まれて姿を見せた、と詠んでいる。高間の山に雲の陰もなく、金山純白の雪に覆われた姿を見た時の感動の心を詠もうとした作かと思う。ただ、俊成が判詞に指摘するように、上句の表現には問題があるかと思われる。山のあたりの雲を「雲の衣」としてとらえることは、俊頼の歌、

山のはに雲の衣をぬぎすててひとりも月のたちのぼるかな（高陽院七番歌合）四二、『金葉集』一九四

にも見られるが、「雲の衣」を山が「腰に巻く」と詠んだのは珍しいとらえ方であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「越の片道」「いつわた山」などの語を用いている点、「なつかしきさま」には思われぬが、「かかるかたに」ではさてもありなん」と評する。遠い北陸への旅に関する語で、聞き慣れた優雅な歌語を用いた表現とは趣を異にするが、歌の内容から見て適当と評価したようである。

右歌については、「いとめづらしく」見えると言っているが、高間の山が「雲の衣を腰に巻く」と詠んだのを問題として指摘する。こういう姿としてとらえられた高間の山は、この山を詠んだ先行歌のもつイメージから見ると、確かに異様に思われたであろう。

十三番 左勝

成仲宿禰

二雪ふれば草の戸ざしもうづもれぬいかはすべきあけんはるまで

右

政平

二雲井までふる雪なれば名に高さことわりなりやこしのしら山

左右ともになだらかに見ゆるにとりて、左の、くさのとざし、あけんはるまでなどいへる心、をかしきこゆ。右の、こしのしら山も、まことに雪たかくきこゆるを、ふる雪なれば、ことわりなりやといへる、おなじきことにやとも見ゆれば、左のかちと申すべし。

【通釈】

十三番 左勝

成仲宿禰

雪が降ると、わびしい住居の戸も（雪に）うずもれた。どうすればよからう、——年が明けて（戸の開けられる）春になるまで。

右

政平

二〇（空に）高くそびえる峰まで、雪が降り積もるのだから、名高いのも道理というものだ、——越の白山は。

左右の歌はともに滞らず詠まれていると見えるが、それにつけて言えば、左の歌で、「草のとざし」と言い、（それを受けて）「あけん春まで」などと詠んだ趣向は、面白く思われる。右の歌の越の白山も、まことに高い峰の雪で名高いと思われるが、「降る雪なれば」と言い、（さらに）「ことわりなりや」と言ったのは、同様のこと（の繰り返し）の気味があるとも思われるので、左の勝と判定しよう。

【注】○草の戸ざし 草が生い茂って家の入り口をとざすこと、また、そんなわびしい住居を言う語であるが、この場合そういう住居の戸を特に意識して言っているらしいことが、後に「あけ」という語を用いている点から察せられる。同様の例に、「秋の夜の草のとざしのわびしきはあくれどあけぬ物にぞありける」（『後撰集』八九九、藤原兼輔）がある。○あけん春 「あけ」は、年が明ける意に、戸を開ける意を掛けたと見られる。○雲井までふる雪 大空高くそびえる峰まで降り積もる雪。「雲を」を山の高い所を指して用いた例には、「むかしより名にふりつめる白山の雲井の雪はきゆるまもなし」（『信明集』一三三）があり、白山の雲井の雪を詠んだ先行歌である。○こしのしら山 越の白山。『能因歌枕』では加賀の国の歌枕、「八雲御抄」等では越前の国の歌枕とする。白

山は、石川県と岐阜県の境に主峰（標高二七〇二メートル）があるが、その山系は富山県や福井県に及ぶ。和歌では雪と併せて詠まれるのが一般である。

【考察】左の歌は、降り積もる雪に「草の戸ざし」がうずもれて、春になるまでなすすべもない思いを詠む。「とざし」に対して「あけん」と言ったところに趣向が見られる。

右の歌は、高い峰まで雪が降り積もるので、「越の白山」が名高いのも道理だ、と詠む。山の高いことに「名に高き」を関連させた作であろうが、やや平凡な趣向かもしれない。

俊成の判詞は、「左右ともになだらかに見ゆる」点を認めた上で、左歌についてはさらに、「とざし」に「あけん」を対応させた趣向を「をかしきこゆ」と評価している。

右歌については、「ふる雪なれば」「ことわりなりや」を引き、「同じきこと」とも見えると指摘している。これはどういう意味の指摘なのか、分かりにくいようにも思われるが、右歌が「……であるから」の意の言葉を用いた上で、さらに「道理である」の意の言葉を置き、作意の筋道を繰り返し示そうとしたかに見える点を取り上げ、それが歌の表現として感心できないことを言ったものかと思う。

十四番 左

心覚

二二ふる雪にまきのそま山跡たえてをのひびきも今朝はきこえず

右勝

俊恵

二三雪降れば木木のこずゑに咲きそむる枝よりほかのはなもちりけり

左、歌ざまはいときよげに見ゆるを、まきのそま山に雪ふり、をのおときこえずなどいへること、常にきこゆることにや。右は、木の梢にさきそむる枝とつづけるほどぞ、いかにぞや、きさまがへらるる心ちすれど、枝よりほかのなどいへるすがた、いとをかしければ、以て右勝。

【通釈】

十四番 左

心 覚

二三 降る雪に、真木の杣山は来る人もなく、(木を切る) 斧の響きも今朝は聞こえない。

右勝

俊 恵

二三 雪が降ると、木々のこずえに、咲き初める枝の花とは違った(雪の)花が散ることだ。

左の歌は、歌の姿は大層すつきりと詠まれていると見えるが、真木の杣山に雪が降り、斧の音が聞こえないなどと詠んでいるのは、歌でよく耳にすることだろうかと思う。右の歌は、「木々の梢に咲きそむる枝」と言葉が続いているあたりは、どういうものか、間違つて受けとられる虞があるように思うが、「枝よりほかの(花も散りけり)」などと詠んでいる姿が、大層面白いので、右の歌を勝とする。

【注】○まきのそま山 真木(杉・檜など)を植林して木を切り出す山。

【考察】左の歌は、降る雪のため「真木の杣山」に人も来ず、斧の音も今朝はしない、と詠む。雪の朝の静かな杣山の情景であろう。ただし類似した先行歌に次の作がある。

ふる雪にそま山びとも跡たえていづらはをの音きこゆらん(『為忠

家後度百首』四九九、藤原為業「杣山雪」)

右の歌は、木々に降る雪を花に見立ててとらえている。こういう見立ては古くから行われ、『古今集』にも次のような歌がある。

雪ふれば冬こもりせる草も木も春にしられぬ花ぞささける(三三三、

紀貫之)

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし(三

三七、紀友則)

右歌はそういう見立ての趣向を受け継いでいるが、下句「枝より外の花も散りけり」あたりは独自性が見られるかと思う。ただ俊成が判詞で注意するとおり、第二句第三句は続けて見ると意味が混乱する虞がある。

後に『千載集』に収められたこの歌を、『新日本古典文学大系』の注では次のように解されている。

雪が降ると木々の梢に咲きはじめた(雪の)花も、枝とは別の(雪の)花もともに散ることだよ。

これは一首の第二句と第三句を続けて、七五調の歌として解されたものと思うが、第二句は後に小休止があつて第三句に直接続かない構文ではなからうか。それで、雪が降ると木木のこずえに、咲き初める枝の花とは違った(雪の)花が散る、の意に解したいと思う。

俊成の判詞は、左歌については、「歌ざまはいときよげに」見えるが、すでに詠み古された域を出ないことを指摘している。「まきのそま山」が雪で人の「跡たえ」ることは、

都だに雪ふりぬればしがらきのまきのそま山あとなえぬらん(『堀河百首』九五七、隆源、『金葉集』二九一)

と詠まれているし、全体として前記の為業の歌と類似するような点を指摘したのであろう。

右歌については、第二句第三句あたりの言葉続きが誤解される虞がある点を指摘するが、「枝よりほかの」といった詠み様は「いとをかし」と評価し、勝と判定する。やはり右歌には独自の価値を見いだしていたのであろう。

【備考】十四番右歌は『千載集』(四六六)に収められている。

恋

一番

左勝

権中納言

二三 しまたる伊勢をのあまや我ならんさらば見るめをかるよしもがな

右

小侍従

二四 夢にさへ見し面影の立ちそひてぬるよもやすむ心ちこそすれ

左歌、伊勢をのあまやわれならむとおきて、さらば見るめをなんといへるすがた、いとどをかしも侍るかな。右歌、よるのころもをかへし、あかつきのまくらをそばたてても、夢のうちにぬれば、

あはれともつらしとも見むことこそつねのことなれ、夢のうちにさへおもかげのたちそはんこと、いかがおほえ侍れ。左のかちとすべし。

【通釈】

恋

一番 左勝

権中納言

二三潮水にぬれる伊勢の海人、それは（恋の）涙にぬれる私の姿だろうか。それなら海人が海松布を刈るように、見る——あの人と会う手だてがほしい。

右

小侍従

二四夢にまで、あの人の会った折の面影が寄り添うように浮かんで、（ひとり）寝る夜も安らぐ気がするのです。

左の歌は、「伊勢をのあまや我ならん」と言った上で、「さらばみるめを」などと詠んだ姿が、ひとしお面白く思われるのです。右の歌は、（恋しい人に夢にでも会いたいと）夜の衣を裏返して着、あるいは夜明け前に眠れずに人を感じるような場合にしても、夢の中になると、（心のままにならず、）悲しいとか恨めしいとか思うのが一般のことであるのに、夢の中にまで恋しい人の面影が寄り添うように浮かぶということは、いかがなものかと思われるのです。左の勝としようと思う。

【注】○しほたるる 潮水に衣服がぬれて滴が垂れる。涙で袖がぬれる意味にも用いる。○伊勢をのあま 伊勢の海人。「を」は間投助詞。○見るめ 「海松布」（ミル科の緑色の海藻）と「見る目」（会う境遇）との掛詞。○よるのころもをかへし 夜に就て寝る衣服を裏返して着る意で、そうすれば恋しい人が夢に見えるという古代の俗信があった。「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る」（『古今集』五五四、小野小町）などと詠まれている。○あかつきのまくらをそばたてて 前の「よるのころもをかへし」に対応して置かれた語句で、「枕をそばたつ」は白居易の詩句「遺愛寺鐘欹枕聴」の訓読として平安以降の文

学に用いられることが多いが、語意は必ずしも明確でない。ここでは『源氏物語』（須磨）に「ひとり目をさまして、枕をそばたてて四方の嵐を聞きたまふに」と述べた情景などが俊成の念頭にあったかと見、「枕をそばたつ」は、枕を立てて頭をもたげる意（新日本古典文学大系『源氏物語』）で、眠れずに人を感じる様子を示すと考えておく。

【考察】左の歌は、潮水にぬれる伊勢の海人に、恋の涙にぬれる自分をなぞらえた作である。同様に「伊勢をのあま」を詠み入れた歌、

鈴鹿山伊勢をのあまの捨て衣しほなれたりと人や見るらん（後撰集）
七二八、藤原伊尹

によったところがあるうか。「伊勢をのあま」の縁で「海松布」を出し、「見る目」を掛けて詠んでいる。

右の歌は、夢にまで恋人の面影が現れて、ひとり寝る夜も「やすむ心ち」がすると詠む。

俊成の判詞は、左歌については、前記のように、伊勢の海人に自分を擬した上で「さらば見るめを」と詠んだ歌の姿を、ひとしお「をかしく」思われると評価する。

右歌については、恋の思いが深い場合にしても、夢の中では心のままにならず「あはれ」とか「つらし」とか思うのが普通であるのに、夢に恋人の面影が現れて「やすむ心ち」がすると詠むのはいかがなものかと批判している。これは作者の側に立てば、右歌のような場合もあり得るとも言えようが、伝統的な歌心を重んじる俊成の立場からすれば、それは恋の歌として「あはれ」に欠けると見られるのであろう。

【備考】一番左歌は『千載集』（七一九）に収められている。

二番

左勝

別当

二五あぢきなやあはぬつらさをたねとしてつるぎの枝のみとやなるべき
右

三河

二六かずならぬわれから人もあひ見ねばこひしきたびに身をぞうらむる
左歌、已捨（本文ナシ、諸本同ジ）

右歌は、もにすむむしのなどいへるよりは、われから人もあひ見ねばなどいへる、よわくきこゆれば、左はつよからんとぞ思給ふる。

【通釈】

一番 左勝

別当

二五やるせないことだ、——思う人と会わないつらさが因となって、地獄の剣の枝に貫かれる身となるのであろうか。

右

三河

二六とるに足りない私のせいで、人も契りを結ばないのだから、恋しくなるたびに、わが身を恨むのです。

左の歌は、……「已捨」ノ後ノ本文ナシ

右の歌は、「藻に住む虫の（われからと音をこそなめ世をばうらみじ）」などと詠んだ歌に比べると、「われから人もあひ見ねば」などと詠んでいるのが、弱い感じに思われるので、その点、対する左の歌の方は印象が強かろうと思う次第です。

【注】○たね 原因。仏教で言う「因果」の「因」に当たる。また「種」は後の「技」「み（実）」となる「などと縁語の関係でつながる。○つるぎの枝 地獄にある木の枝で、枝または葉が剣になっているという。『金葉集』には、「地獄絵につるぎの枝に人のつらぬかれたるを見てよめる」の詞書で、和泉式部の歌「あさましやつるぎの枝のたわむまでこは何の身のなれるなるらん」（六四四、松井本『和泉式部集』では第五句「なるにかあるらん」）が見える。○もにすむむしの 『古今集』に収める「あまのかる藻にすむ虫のわれからと音をこそなめ世をばうらみじ」（八〇七、藤原直子）の歌を言う。○よわく 評語としての「よわし」は、対立語と見られる「つよし」とともに、用例によって語意にかなりの相違があるようである。ここで俊成が用いた「つよし」「よわし」は、比較された歌によって考えると、一首から受ける印象の強さ弱さを表したものであるかと思う。

【考察】左の歌は、愛欲を煩惱と見る観点から詠まれていて、恋の相手と会えないのをつらく思うことから末は地獄で剣の枝に貫かれる身となる

うか、「あぢきなや」と嘆いている。修辭の面では「たね（種）」「枝」「み（実）」などを縁語にして詠んでいる。ただ恋の歌ではないが発想や修辭技巧の似た先行歌に、

あさましやつるぎの枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらん
『金葉集』六四四、和泉式部

がある。また下句が同じ先行歌として、

きえかへりたへせずたゆるたまのをはつるぎのえだの身とやなるべ
き
『江師集』二九二

がある。左歌がこれらの先行歌の影響の下に作られていることは否定できないであろう。

右の歌は、とるに足りない自分ゆえに恋しい人も契りを結ばないのだから、恋しく思うたびにわが身を恨む、と詠んでいる。恋する自分を卑下して嘆く心を述べた作であるが、歌の心も言葉も素直すぎるかもしれない。この点は、「われから」の語を用いた内容を詠む歌で、俊成が判詞に引く一首、

あまのかる藻にすむ虫のわれからと音をこそなめ世をばうらみじ
『古今集』八〇七、藤原直子

のような、言葉を自在に生かした面白さをもつ作と比較すれば明らかで、右歌の表現は切れ味が劣るかと思う。

俊成の判詞に、右歌を「よわくきこゆれば」と評するのは、そんな意味で右歌から受ける印象の弱さを指摘したのではあるまいか。そしてこの右歌と比べると左歌は「つよからん」と見られることになるのである。ただ左歌は、先に見たように先行歌によるところが大きい弱点があるので、これを勝とする判定については、なお疑問が残るようにも思う。しかし左歌を俊成がどう見ていたかを示す判詞の本文が諸本みな失われているために、当面この点を考える手掛かりが得られない。

三番 左勝

宰相中将

二七つれもなき人の心はうきぬなはくるしきまでぞおもひみだるる

右

弁

二ハかくばかりつれなき人にむかしなどくる契をむすばざりけん

左、人のころはうきぬなはとつづけるほどこそ、をかしく見え侍れ。すゑの、くるしきまでといへるほどや、かたつかたの心つよからぬ心すらむ。右は、つれなき人にむかしなどといへるほど、をかしきこゆるを、すゑの、とくるちぎりやいかなるちぎりにかとおほゆらむ。よみて、なほもちて左のかちとす。

【通釈】

三番 左勝

宰相中将

二七すげないあの人のがつらくて、水に浮く蓴を手繰るのではないが、苦しいまでに思い乱れるのです。

右

弁

二八これほどまですげない人に、昔なぜ解ける契りを結ばなかったのだらう（と悔やまれます）。

左の歌は、「人の心はうきぬなは」と詠んだあたりが、特に面白く思われます。ただ下の句で「くるしきまで」と言っているあたりは、言い掛けられた片方の心が印象づけられない感じがするであろう。右の歌は、「つれなき人に昔など」と言っているあたりが、面白く思われるが、下の句の「とくる契り」とは一体どんな契りだろうかと（不審に）感じられると思う。そのため、なおのこと左の勝と判定する。

【注】○つれもなき 無情な。○うきぬなは 浮き蓴。水に浮いているジュンサイ。ジュンサイは、スイレン科の水生多年草、若芽が食用になる。ここでは「浮き」に「憂き」を響かせる。また「ぬなは」は水中に長い茎をもつので、それを手繰る、「繰る」ことから後の「苦し」を修飾する語として用いた。このような用い方の前例になる歌は「考察」に挙げる。○とくる契 「とく」を用いたのは後の「むすぶ」との縁によるかと思うが、この語句の意味するところは、俊成が判詞に指摘するように今一つ明らかでない。将来まで束縛されない約束の意味か。○かたつ

かたの心 片方の心。ここでは「くるしき」に言い掛けられた「繰る」の意味を指すのであろう。

【考察】左右ともに、つれない恋人への思いを詠んでいるが、左の歌は「うきぬなは」を修辭に用いて、苦しいまでに思い乱れると詠んでいる。このような修辭法は先例があり、

なき事をいはれの池のうきぬなはくるしき物は世にこそありけれ
〔拾遺集〕七〇一、よみ人しらず

いかなれば知らぬに生ふるうきぬなはくるしや心人知れずのみ〔後拾遺集〕六〇六、馬内侍

などの歌に見られる。ただし左歌は、これらの先例のように「うきぬなは」の前に「池」や「沼」の語を置くことをせず、「人の心はうきぬなは」と続けるので、相手の無情を憂く思う心をより強く印象づけるとも言えよう。

右の歌は、つれない恋人に対して、昔なぜ「とくる契」を結ばなかったのだらうと悔やむ心を詠んだものであろう。ただ「とくる契」の内容は今一つ明らかでないところがある。

俊成の判詞は、左歌の「人の心はうきぬなは」、右歌の「つれなき人に昔など」あたりの言葉続きを「をかし」と評価するが、特に右歌の「とくる契」の内容が不明な点を欠点として挙げ、対する左歌を勝と判定している。

【備考】三番左歌は『続後撰集』（一六六二）に収められている。

四番 左

左大弁

右勝

右京大夫

二九こひしきはその色としもなきものをなど身にしてみてもおもふなるらん
左歌、めづらしきさまには見えはべるを、なかの五字ぞよろしからずや。右歌、なだらかにきこゆ。をはりの句ぞいますこし思ふべくやと見えたれど、ことなるとがなければ、右のかちにこそ。

【通釈】

四番 左

左大弁

二九言い表しようもない恋の火は、あなたが持っていたのでした、——会
い初めた時から、このように恋いこがれたのです。

右勝

右京大夫

三恋しさは、何色という色もないのに、なぜ色に染まるように身にしみ
て、恋しく思うのでしょうか。

左の歌は、目新しい様子には見えますが、第三句（「もたりけれ」）
がよくないように思う。右の歌は、滞りのない詠みぶりと思われる。
ただ第五句（「思ふなるらん」）は今少し工夫してよいかと見られる
が、目立つ欠点もないので、右の勝であろう。

【注】〇いひしらぬこひ 言い表しようもない恋の火。「こひ（恋）」に
「火」を掛け、後の「こがるる」と縁をもたせた。〇もたり 持つている。
「持つ有り」の変化した語。〇こがるる 恋いこがれる。恋い慕う意味に
焼け焦げる意味を重ね、前の恋の火に応じた。〇身にしてみて 「身にし
む」は、心に深く感じる意であるが、「しむ」は、色に染まる意に用いら
れる点で、「その色としもなきものを」を受けた表現。

【考察】左の歌は、「恋」に「火」を掛けて、相手が恋の火をもっていた
ので、自分は会い初めた時から恋いこがれた、と詠む。「恋」に「火」を
掛ける表現は古くからあるが、それを生かした作である。

右の歌は、「しむ」の語が心にしみる意味にも色に染まる意味にも用い
られるところから、恋しさは色もないのに、どうして身に「しみ」て恋
しく思うことか、と詠む。この「色」に「しむ」ことを「身にしむ」こ
とに関連させた表現の先例としては、

吹く風は色も見えねど冬くれればひとりぬる夜の身にぞしみける（後
撰集）四四九、よみ人しらず

秋ふくはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらん（和
泉式部集）一三二、詞花集一〇九

などの歌がある。ただし右歌は「恋しさ」に関してこのように詠んだも

ので、その点はこれらの歌と違っている。

俊成の判詞は、左歌については、「めづらしきさま」と評するが、第三
句「もたりけれ」を「よろしからずや」と批判している。「もたり」とい
う語は、散文には用いられても、八代集の歌には用例がないようである
から、洗練された歌語とは見られていなかったかと思われる。右歌につ
いては、「なだらかにきこゆ」と評価し、「ことなるとがなければ」と言
って勝としている。

五番 左

重家朝臣

三夜とともにくなくころのいかなれば恋よりほかにちらぬなるらん

右勝

頼政

三紅のなみだにそまるこひごろもかへせばそでぞうらみなりける

左、心ことばをかしく侍る。和泉式部が歌に、きみこふるころは
ちぢにくたくれどひとつもせぬ物にぞありける、といへる心にぞ
かよへる。右、かへせば袖ぞなどいへるすがたをかしく見ゆるに、
なみだにそまる恋衣などや、いというのことばともきこえざらん。
されど、万葉集にも、こひ衣きなれの山になどよみたるにや。かか
るかたにて、歌のさまもこれはめづらしきにつきて、右の勝と申す
べし。

【通釈】

五番 左

重家朝臣

三夜通し絶えず碎く心（あれこれと悩む心）が、一体どうして、恋より
外には散らないのだろうか。

右勝

頼政

三紅涙に染まった、恋する身の衣を、（夢にでも会いたいと）裏返すに
つけて、その袖が恨めしい思いを誘うのです。

左の歌は、心も言葉も面白いと思います。和泉式部の歌に、「君恋
ふる心はちぢにくたくれど一つもせぬものにぞありける」と詠ん
でいる心に通じるところがある。右の歌は、「かへせば袖ぞ」など

と詠んだ姿が面白く見えるが、「涙にそまる恋衣」などは、あまり優美な言葉とは思われないであろう。しかし、『万葉集』にも、「恋衣きなれの山に」などと詠んでいたかと思う。こういう方面で、歌の姿もこれは目新しいところから、右の勝と判定しましょう。

【注】○夜とともに 夜通し、の意味であるが、一般に用いられる「よ(世)とともに」(常に、の意)を掛けて言ったとも見られる。○くだくこころ 砕く心。あれこれと悩ます心。○紅のなみだ つらさのあまり流す血の涙。○こひごろも 恋衣。恋をする人の衣服。○かへせば 裏返すと。衣服を裏返しに着て寝ると、恋しい人を見るときという俗信があった。恋一番【注】参照。○うらみ 「恨み」であるが、前の「かへせば」の縁語として「裏」の心を響かせる。○きみこふるこころはちにくだくれど…… 『和泉式部集』(九二)、『後拾遺集』(八〇二)に見える歌。あなたを恋しく思う心は千ちに砕けますが、その砕けた一つもなくならず、恋しさは変わらないのです、との歌意。○いうのことは優の詞。優美な言葉。○こひ衣きなれの山に 『万葉集』(三二〇二)の「恋衣着櫛乃山^{さか}鳴く鳥の間なく時なしあが恋ふらくは」による。この歌では「恋衣着」が衣を着ならずことから「奈良」の序に用いられている。

【考察】左の歌は、恋ゆえに絶えず心を「砕く」のに、その砕けた心がなぜ恋を離れて「散らぬ」のか、と詠む。恋の思いは少しも変わらない、との主意であろう。俊成が判詞に言うように、和泉式部の歌、

君恋ふる心はちちに砕くれど一つもせぬ物にぞありける(『後拾遺集』八〇二)

と同様の内容で、「砕く心」を、砕くと破片になる物のように見えず趣向によっている。

右の歌は、紅涙に染まった「恋衣」を、夢にでも恋の相手に会いたいと裏返すにつけ、その涙のしみた袖が「うらみ」を誘う、と詠む。「うらみ」は、衣を「かへす」の縁語として「裏」の心を響かせている。

俊成の判詞は、左歌を「心こばをかしく」、また右歌を「姿をかしく」

と評している。左右ともに趣向の面白さを特色とする作と見た批評であろう。その上で右歌については、「涙にそまる恋衣」などが優美な言葉でないとしながらも、「恋衣」は『万葉集』にも見える言葉であり、「歌のさま」が「めづらしき」点を評価して勝としている。

六番 左

経盛朝臣

三三 あふことのこのよならねばいとどしくしなんいのちをしからぬかな

右勝

師光

三三 恋しもまたつらしともおもひやるこころいづれかさきにたつらん
左歌、あふことのこの世ならねばといひて、しなんいのちもなど侍る、恋のこころもふかく、さることときこゆ。右歌は又すがたことばいとをかしくて、かたがた思ひわづらはれ侍れど、なほ、またつらしともおもひやるといへるけしき、あはれにも見え侍れば、以て右勝。

【通釈】

六番 左

経盛朝臣

三三 会うことが現世ではかなわないので、なおのこと、いづれ死ぬこの命など惜しくないと思うのです。

右勝

師光

三三 あの人恋しいとも、また冷たさが恨めしいとも思いやるのだが、どちらの心が先立って、私の恋路を導くことであろうか。

左の歌は、「あふことのこの世ならねば」と言って、さらに「死なん命も」などと詠んでいるのが、恋についての思い入れが深く、しかるべきことと思われる。右の歌はまた姿も言葉も大層面白いので、(いづれを勝るとすべきか)あれこれと悩まざるを得ないのですが、やはり、(右の歌に)「またつらしとも思ひやる」と詠んでいる様子は、あわれにも見えますので、右の歌を勝とします。

【注】○いとどしく 一層。○つらし 薄情に思われ、恨めしい。○こころいづれかさきにたつらん (二つの)心のどちらが先に立って

(自分の恋路を)導くことであろうか。

【考察】左の歌は、恋する相手に現世では会えないので、いずれ死ぬ自分の命など、なおさら惜しいと思わないと詠む。その下句は「死なむ命も惜しからぬかな」とあるが、これと似た下句をもつ歌に次の一首がある。

あはれとし君だに言はば恋ひわびて死なん命も惜しからなくに(拾遺集)六八六、源経基

この歌などを参照すると、上句「あふことのこの世ならねば」は、恋しい人に会えず恋い死にする状況が設定されているのであろう。そして現世では会えない以上、いずれは死ぬこの命が一層惜しくない気がする、と詠んだのであろう。左歌全体としては、次の『拾遺集』の歌とある程度似たところがある。

すてはてむ命を今はたのまれよあふべきことのこの世ならねば(『拾遺集』九二七、よみ人しらず)

もつとも左歌は、この『拾遺集』の歌のように相手に呼び掛けるのではなく、自分の思いとして詠んでいる点が異なっている。

右の歌は、恋する人への気持ちとして、恋しい心と薄情を恨む心との二つを挙げ、それを擬人的に扱って、二つの心のどちらが自分の恋路を導くことであろうかと詠んでいる。恋心の観念的なとり上げ方が目立つが、発想としては他にあまり類を見ない作であらう。

俊成の判詞は、左歌については、恋の「心も深く」と思い入れの深さを評価し、右歌については「姿ことばいとをかし」と歌い方の面白さを評価して、優劣の判定に迷うとした上で、右歌で「またつらしと思ひやる」と詠んだあたりを「あはれにも見え」と言って、右の勝としている。右歌の特長が「をかし」の面だけでなく、「あはれ」の面ももつことを評価して勝の理由としたものである。

【備考】六番右歌は『千載集』(七三五)に収められている。

七番 左勝

公重朝臣

三三きみがすむ宿のうゑ木にたなびかん恋ひしなんまに雲となりなば

右

頼輔

三三いとふにはいと思ひぞまさりける恋はつらさにはゆるなりけり

左、心ふかきやうに見え侍り。恋ひしなんまにといへるほどや、たへぬこちやすらん。右はことなることなけれど、やすらかにて優にきこゆるか。すゑの、はゆるなりけりといへることは、おもふべくやと見えはべるに、また、まさりけるとおなじことあれば、いかにも左のかちにこそ。

【通釈】

七番 左勝

公重朝臣

三五あなたの住む家の庭木に、私は雲となつてたなびこうと思う、——恋い死にするままに雲となつたら。

右

頼輔

三六嫌われると、ますます恋しい思いが増すばかりだ、——恋心は、冷たさされる恨めしさで一層つのるのだ。

左の歌は、思い入れが深いように見えます。「恋ひ死なんまに」と言っているあたりは、(恋のつらさに)耐えきれない気持ちがするのだろうと察せられる。右の歌は、格別のことはないけれど、穏やかで優美に感じられるかと思う。(しかし)下の句で「はゆるなりけり」と詠んでいる言葉は、一考を要するかと思われまします上に、また(上の句の)「まさりける」と同様の内容をもつ言葉だから、どう見ても左の勝であらう。

【注】○恋ひしなんまに雲となりなば「まに」は、ままにの意味と一応見ておく。恋い死にするままに、野辺の煙となり、それが雲となつたら、の意味であらう。○恋はつらさにはゆるこの「はゆる」は、一層さかになる意。恋は、相手の無情に対する恨めしさによって一層つのる。○おもふべくや一考を要するであらうか。

【考察】左の歌は、こがれ死んで、その火葬の煙が雲となつたら、恋する人の家の庭木の辺りにたなびこうと思う、との大意であらう。この歌合

の翌年（一一六七年）に経盛の家で催された歌合に、似た趣の歌が見られる。

恋ひしなばもえむけぶりを人はみよ君がかたにぞ思ひなびかん（一

〇八、資隆）

この歌には左歌の影響が考えられそうである。

右の歌は、恋する人に嫌われるとますます思いが増す、恋心は相手の冷たさを恨めしく思うことで一層つのる、との大意であろう。『後撰集』のよみ人しらずの歌、

あやしきもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき（六

〇八）

と似たところがあるが、この右歌は上の句と下の句に同様の内容を繰り返している。

俊成の判詞は、左歌については「心深き」ように見えると評している。「恋ひ死なん」場合に思いを及ぼした思い入れの深さを評価したものであろう。右の歌については格別のことはないと評しながらも、「安らかにて優に」感じられる点は認めている。ただ下句の語句「はゆるなりけり」は、一考を要するとしている。これは、このような「はゆる」は、その用例が八代集では先に挙げた『後撰集』よみ人しらずの歌（『拾遺集』九九六に重出）の外に見られないから、歌語でないように思われていたのかもしれない。また俊成は、この「はゆるなりけり」が上句の「まさりける」と同様の意味である点を指摘しているが、これは歌病の同心病に当たることが意識されているのであろう。

八番

左勝

通能朝臣

三三 錦木もさてこそよそに朽ちにしか恋すてふ名のなぞや立つらん

右

有房

三六 おのづからあふにやかふとおもはずは恋には身をもなげつべきかな

左の歌、にしきぎはむなくくちてやみにけんに、恋すてふ名のなぞやたつらんといへる、すがたことばいとをかしこそきこえ侍れ。

右歌も心はあしくもあらぬを、あふにやかふといへるほど、もじのたらぬにやあらむ。左の勝と見えたり。

【通釈】

八番 左勝

通能朝臣

三三（恋する人の家の前に立てた）錦木も、そのままむなく朽ちたのに、恋をしているといううわさが、なぜ立つのだろうか。

右

有房

三六もしかして（恋人に）会うのに命を換えることがあるか、と思わなければ、つらい恋には身を投げてしまいそうになります。

左の歌は、錦木はむなく朽ちることになったのに、「恋すてふ名のなぞや立つらん」と詠んだ、その姿言葉が大層面白いと思われる。右の歌も発想はわるくはないのだが、「あふにやかふ」と言っているあたりは、言葉が足りないように思う。左の勝と見られる。

【注】〇錦木 にしきぎ。陸奥で、男が女に会おうとする時、女の前になつた彩色した木で、女に應じる心があれば取り入れる習わしであったという。〇あふにやかふ 「あふにかふ」は、会うのに換える意味であるが、何を会うのに換えるかが示されていない。これは、恋の歌の伝統的な発想として、命を会うのに換える意味で、恋人に会うのに自分の命を引き換えにすることを言ったのであろう。『拾遺集』によれば、「命をばあふにかふ」とか聞きしかど我やためしにあはぬ死にせん」（六八二、よみ人しらず）、「よそながらあひ見ぬほどに恋ひ死なば何にかへたる命とかいはむ」（六五五、よみ人しらず）などの歌がある。

【考察】左の歌は、男が求愛のしるしとして女の家の前を立てるという「錦木」を歌材に用いた作である。錦木は立てたまま空しく朽ちたのに、あらぬ恋のうわさがなぜ立つのだろうか、と嘆く心が平明に詠まれている。

右の歌は、第二句「あふにやかふ」の意味が通じにくいが、【注】で触れたように、

命をばあふにかふとか聞きしかど我やためしにあはぬ死にせん（『拾遺集』六八二、よみ人しらず）

などによって、「あふにかふ」は、恋人に会うのに命を引き換えにする意味と知られる。すると一首は、恋人に会うのに自分の命を引き換えにすることもあろうかと思うからこそ、つらい恋でも身を投げることをせずにいるのだ、との心を、「……と思はずは」と逆の場合を仮定する形で詠んだと見られる。

俊成の判詞は、左歌については「姿言葉いとをかし」と評する。右歌については「心はあしくもあらぬ」とするが、「あふにかふ」の意味が通じにくい点を「文字のたらしめ」と批判し、左の勝としている。

九番 左 季経朝臣

三えいかなれば恋をばわれにならしてあひ見ることををしへざるらん

右勝 隆 信

三われゆゑの涙とよそにこれをみばあはれなるべき袖のうへかな

左、ことのいはれをかしくも見ゆるを、あひ見る事ををしへざるらん、をさなきやうにやきこゆらん。右歌、よろしく侍るにや。仍為レ勝。

【通釈】

九番 左 季経朝臣

三えいとして恋人は、恋するくせを私につけておきながら、会うことを教えてくれないのだろうか。

右勝 隆 信

三もし恋人が、自分のせいで涙していると、よそながら私の様子を見るなら、あわれと思うに違いない、この袖のぬれようです。

左の歌は、歌われたことの理由のつけ方は面白いとは見えるが、「あひ見ることををしへざるらん」は、幼い口ぶりのように思われるであろう。右の歌は、問題のない作かと思えます。それで右の勝とする。

【注】○ならはして「ならはし」は動詞の連用形で、「ならはす」は、習慣となるようにさせる意。○われゆゑの涙 自分のせいで流す涙。○

よそにこれをみば『千載集』では「これをよそにみば」の形で収められる。「これ」は「袖のうへ」の涙を指す。「よそに」は、傍観者の立場で。

【考察】左の歌は、なぜ恋人は自分に、恋することを「ならはし」ておいで、会うことを「教へ」ないのだろうか、と詠む。恋しい人に会いたいと願う心を、こういう形で詠んだ趣向に特色のある作であろう。

右の歌は、もし恋人がよそながら、自分のせいで涙していると私の袖の涙を見れば、あわれと思うに違いない、との心であろう。恋する人に知らせずにいる恋の深い嘆きを訴えた作と見られる。

俊成の判詞は、左歌の趣向は「をかしくも見ゆる」とするが、下句を「をさなきやう」と批判している。そして右歌を「よろしく」と評価し、勝としている。

【備考】九番右歌は『千載集』（七五七）に収められている。

十番 左 資 隆

三逢坂のせきをゆるさで年ふればおもふ心もゆかずぞ有りける

右勝 顕 昭

三かはりゆくすがたをのみやつつまましまだにくつる袖なかりせば

左、歌ざまはをかしくも侍る。こころゆかずおほえんばかりは、この心すくなくやあらん。せきをゆるさでといへることは、かの清少納言は函谷関のむかしのことよせて、よにあふさかのせきはゆるさじとよめる、ことにをかしきこゆるにや。右歌は、いかにぞかたつかたの心いひおほせぬやうにぞきこゆれど、すがたをのみやつつまましまだといへることばつづき、いとをかしきこゆれば、右のかちと申すべし。

【通釈】

十番 左 資 隆

三逢坂の関を通るのを（会うのを）許してくれないままで、年がたつたので、思ふ心も行かずに（心も晴れずに）いるのです。

三三やつれてゆく姿だけは、包み隠し得たであろうか、——（恋のつらさに）流す涙で袖の朽ちることが、もしなかったら。

左の歌は、歌の姿は面白いと思います。（ただ）「心ゆかず」思われるというだけでは、恋の心が少ないだろうかと思う。（また）「関を許さで」と詠んだ言葉も、あの清少納言は函谷関の昔の故事に関係させて、「よに逢坂の関は許さじ」と詠んでいる点で、特に面白く思われるのだろうかと思う。右の歌は、どういふものか一方の心（恋の心）が十分に言い尽くされていないように感じられるけれども、「姿をのみやつつままし」などと詠んだ言葉の続け方が、大層面白く思われるので、右の勝と判定しましょう。

【注】○逢坂のせき 近江の国の歌枕。今の天津市の逢坂付近、近江と山城との境の逢坂山の東側に置かれた関。男女が「逢ふ」ことを示す語として、恋の歌に多く詠まれる。○心もゆかず 心も晴れず。ここでは「関を許さで」の縁で「行かず」と言った。○なみだにくつる袖（恋のつらさのために）たえず流す涙で朽ちる袖。○清少納言は函谷関のむかしのことよせて…… 清少納言が函谷関の故事に関係づけて「よに逢坂の関はゆるさじ」と詠んだことを言う。「函谷関」は、中国河南省北西部の交通の要衝に秦代に置かれた関で、秦を逃れる孟嘗君が鶏鳴を巧みにまねる食客の働きによって関門を開かせ通過した故事（『史記』孟嘗君伝）が知られている。清少納言の歌のことは、『枕草子』にも見えるが、『後拾遺集』（九三九）によると、詞書に「大納言行成、ものがたりなどし侍りけるに、内の御物忌にこもればとて、いそぎ帰りにてつとめて、鶏の声にもよほされと言ひおこせて侍りければ、夜深かりける鶏の声は函谷関のことにやと言ひにつかはしたりけるを、たちかへり、これは逢坂の関に侍りとあれば、よみ侍りける」とあって、「夜をこめてとりのそらねにはかるともよに逢坂の関はゆるさじ」の歌が出ている。歌の大意は、夜のまだ深いうちに鶏の声をまねてだまそうとしても、函谷関ならともかく、決して逢坂の関は許しますまい。

【考察】左の歌は、恋する人が会ってくれないことを「逢坂の関を許さで」と言い、それに応じて自分の心が晴れないことを「心も行かず」と言った点に趣向のある作である。

右の歌は、仮定の条件を下句に置いて倒置しているが、普通の順序にもしせば、もしも恋のつらさに流す涙で袖が朽ちていなかったとすれば、やつれてゆく姿だけは袖で包み隠せただろうか、という心であろう。恋にやつれる身の嘆きを強調した作と見られる。

俊成の判詞は、左歌については、「歌さまはをかし」と評価するけれども、「思ふ心もゆかず」というだけでは恋の心が少ないと批判している。また「逢坂の関」を許さないことを詠み入れた点について、同様の清少納言の歌の場合は函谷関の故事に関係させているから特に面白いのだと指摘するが、これは左歌の趣向がなお単純な点に触れたものであろう。

右歌については、「片つ方の心言ひおほせぬやう」に感じられると批判している。これは、やつれて嘆く心は出ているが、それが恋のつらさを嘆く心であるのが十分表わされていない点を指摘したものかと思う。しかし「姿をのみやつつままし」などと詠んだ言葉続きを「いとをかし」と評価し、右の勝としている。

十一番

左勝

頼保

右

寂念

三三恋かはにしづむにつけて思ふかな我が身も石となるにや有らん
左、恋かはにしづむ、わが身もいしなどいへる、ふかくかたき儀なるべし。但、此石になることは、もし望夫石と申すことにやあらん。そのかみぞおろおろ見はべりしかば、武昌北山上有望夫石、其状如三人立。むかし貞婦ありけり。そのをとことほきくにへゆきけり。わかれをしみて、かの山のうへにたてりて夫を見おくりけるが、化してたてる石となりけり。されば、こひかはにしづむにはおもひいづべしとおもほえねど、ただ石になるといふばかりに

はべるめり。右、まつに心はかくれどもなんといへるすがたよろしくきこゆるを、すゑの句やこともなく侍らん。左の川にしづむ石、右岩におふる松、堅柔雖異、勝劣已同。仍為持畢。^{もたひら}

【通釈】

十一番 左持

頼保

三 恋川に深く沈むにつけて思うことだ、——わが身も恋にうちこむあまり、石となるのであろうか。

右

寂念

三 岩にも松は生えるので、あきらめず待つよう心掛けてきたけれど、恋は実らぬまま、年が過ぎたことだ。

左の歌は、「恋川に沈む」、「我が身も石」などと詠んでいるが、これは（恋心が）深い、また固い様子を表したものであろう。ただ、この「石となる」ことは、あるいは望夫石についての故事を言っているのであらうか。（望夫石に関しては）かつて大体のことを読みましたが、それによると、武昌の北の山の上に望夫石があり、石の形が人の立つ姿のようであったという。これは、昔貞節の固い女性があり、その夫が遠い国へ行った折に、別れを惜しんで、その山の上に立って夫を見送ったのが、変じて石となったというのである。そういうことなので、恋川に沈む場合には心に浮かべるような事柄とは思われないのだが、（するとやはり）単に石になるということだけを言ったものでしょう。右の歌は、「松に心はかくれども」などと詠んでいる姿が一応よいと思われるが、下の句は平凡であらうかと思うのです。左の歌に詠まれた川に沈む石と、右の歌に詠まれた岩に生える松は、堅と柔との相違はあるけれど、優劣の差はつけられない。そのため持と判定した。

【注】○恋かは 恋川。恋の悩みの深さを、川の深いのに例えて言った語。
○岩におふる松 岩の上に生える松。『古今集』の「種しあれば岩にも松はおひにけり恋をし恋ひばあはざらめやも（五二二）や、『後撰集』の「種はあれどあふ事かたき岩の上の松にて年をふるはかひなし」（八〇七）

による語句であらう。「松」は「待つ」を掛ける。○望夫石 出征する夫を山上で見送った妻が化したという石。中国湖北省武昌の北の山にある。（『幽明録』）

【考察】左の歌は、恋の悩みの深さを「恋川に沈む」と言い、それに付けて「我が身も石となる」のだろうかと思う、と詠んでいる。

右の歌の上部に「岩におふる松に心はかくれども」と言うのは、「注」に挙げたが、

種しあれば岩にも松はおひにけり恋をし恋ひばあはざらめやも（『古今集』五二二、よみ人しらず）

の歌や、これを受けた形の一首、

種はあれどあふ事かたき岩の上の松にて年をふるはかひなし（『後撰集』八〇七、よみ人しらず）

の歌によって、岩の上にも松は生えるので、会うのが難しく見えても、待つように心掛けたが、という上句の心であらう。そして下句「かひなき恋に年ぞへにける」は、『後撰集』八〇七の歌の下句と同じく、待つかいない恋のままで年が過ぎた、との意と思われる。

俊成の判詞は、左の歌については、「わが身も石となる」と詠んだのを、あるいは望夫石の故事によったかと言った上で、そうすると「恋川に沈む」ことと懸け離れ過ぎるから、単に「石になる」というだけの意味だろうとする。作者は望夫石を意識して詠んだとも思われるが、その場合は俊成の言葉は批判の意味をもつことになる。右歌については、上句は「姿よろしく」思われるが、下句が「こともなく」、平凡とし、結局持と判定している。

十二番 左

西遊

右勝

生西

三 我がこひはうけおふ鷹にあらねどもあふことぬるき頼をぞする
三 老いぬれば錦木をだにえぞたてぬちつかこるべき齢ならねば
左の歌、うけおふ鷹 ^{かけおふ 群鷹如也 歌合部題} あふことぬるしなどいへるけしき、ただなら

でをかしく。右、としのほどおもひしりながら、なげきなやめるけしき、あはれにも侍る。ちかくかやうなること、ききし心地ぞすれど、ひがおぼえにもあらむ。ちつかこるべきなどいへるすがた、なほをかしく見え侍れば、右勝とすべし。

【通釈】

十二番 左

西遊

「言わたしの恋は、獲物を追う鷹ではないが、鷹の手ぬるいのを嘆くように、恋人の会うことに乗り気でないのを嘆くばかりです。」

右勝

生西

「三年を取ったので、（恋人の家の前に）錦木を立てることさえできぬ、千束も切り出せる年ではないから。」

左の歌は、「うけおふ鷹」^{「歌合部類」}「あふことぬるし」などと詠んだ様子が、普通の歌と違って面白く思われる。右の歌は、年の程を思い知りながら、（恋をするにつけて）嘆き悩んでいる様子が、あわれに思われます。ただ近いころ、これと似たような歌があったのを、聞いた気がするけれど、多分記憶違いであろう。「千束こるべき」などと詠んだ姿が、やはり面白く見えますので、右の勝としよう。

【注】○うけおふ 群書類従本、歌合部類本では「かけおふ」。「う」と「か」の草体の一種とは字形が類似する。「うけおふ」では、この場合に相当する意味の言葉が見いだしにくい。「かけおふ」（駆け追ふ、翔け追ふ）で、追いかける意味の語とする『日本国語大辞典』の見方に従って解しておきたい。○あふことぬるき 会うことに不熱心な、と恋の相手の態度について言ったものであろう。また鷹狩りの鷹については、相手に立ち向かうことが手ぬるい意味になる。○頼 頼み。しかしこの場合「あふことぬるき」に続く語として意味が通じないと思う。『夫木和歌抄』に収められたこの歌では「なげき」となっているのに従って解しておく。○錦木 恋八番の「注」参照。○ちつか 千束。千たば。錦木を女家の前に立てて受け入れられない場合、男は千束を限度として毎日一束ずつ立てうる習わしがあったという。「錦木はちつかになりぬいまこそ是人

にしられぬやのうち見め」の歌を、『俊頼髓脳』（二三四）や『奥儀抄』（四〇四）に挙げて解説している。『詞花集』（一九〇）には「思ひかねけふたてそむる錦木のちつかもまたであふよしもがな」（大江匡房）の歌を収める。○こる 木を切る。

【考察】左の歌は、この本文のままの形では解釈が難しいと思う。この形によれば「我が恋」は「うけおふ鷹」ではないが「あふことぬるき頼」をする、と詠んでいることになる。鷹を引き合いに出したのは、鷹のつまり木「木居」と「恋」の縁によるところがあるが、「うけおふ鷹」とはどういう鷹なのか。また「あふことぬるき頼」とは、どういう意味なのか、よく分からない。そのため、「注」で触れたように、「うけおふ」は群書類従本・歌合部類本の「かけおふ」の形により、「頼」は「夫木抄」の「なげき」の形によって、

わがこひはかけおふ鷹にあらねどもあふことぬるきなげきをぞするとして解することにした。この形で見れば、自分の恋は、（鷹狩りで）獲物を追いかける鷹ではないが、鷹の獲物に立ち向かう態度が手ぬるいのを嘆くように、恋人の会うことに乗り気でないのを嘆くばかりだ、という内容の作と受けとられる。「我が恋」を「木居」の縁で「鷹」を引き合いに出して詠んだ点に作者の工夫があるのであろう。

右の歌は、老いの身の恋を、「千束」の「錦木」を切り出せる年でないと思いた作である。「千束」の「錦木」は、陸奥の風習として、「注」に挙げたように恋の歌に詠まれるものであるが、ここでは老人の恋の嘆きの種に用いて詠まれている。なお、これと同様の詠み方をした次のような「老後恋」と題する歌が、俊恵の『林葉集』に見える。

おもふとてえぞたてそめ錦木を千つか待つべきよはひならねば
(七五〇)

ただ右歌との先後関係は明らかでない。

俊成の判詞は、左歌については、「うけおふ鷹」^{「歌合部類」}「あふことぬるし」などと詠んでいるのが、普通の恋の歌に見掛けない言い様であるのに注目したようで、「ただならでをかしく」と言っている。右歌については、全

体として老いの身の恋を嘆き悩んでいるのが「あはれ」であるとし、また「千束こるべき」などという詠み様が「をかしく」見えると評して、右の勝と判定している。

十三番 左

成仲宿禰

三七おもひかねなくさむやとてせりつめばたなかの井どに袖ぞぬれぬる

右勝

政平

三八君ゆゑによにあらばやと思ふかなしにてあふべき道をしらねば

左、歌のさまはをかしくおもひよれることとは見ゆるを、たなかの井どには、なぎつむところとこそききならひて侍れ。またちかく、たなかの井どに袖ぬれてあふことなきのなどいへる歌、きこえし心地するを、これは、せりつめばといへる、なぎにはかはりたれど、歌はふるくや。右、すゑの句など優にきこゆ。かみの、よにあらばやあまりやはかりならむ。されど、左おほつかなきところあれば、右の勝と見えたり。

【通釈】

十三番 左

成仲宿禰

三九恋しさに堪えかね、心が慰むかと思つて芹を摘んでいると、田の中の井戸に、つい袖がぬれた。

右勝

政平

三六あなた（への恋しさ）ゆゑに、この世に生きていたいと思うのです、——死んで会うことのできる道を知らないので。

左の歌は、その様子は面白く思いついたこととは見えるが、「田中の井戸」については、水葱を摘む所として聞き慣れております。また近いころに、「田中の井戸に袖ぬれてあふことなきの」と詠んだ歌が知られたように思うが、この左歌は「芹つめば」と詠んでいる点で、水葱とは違っているけれども、歌としては古風であろうか。右の歌は、下の句などは優美に思われる。（ただ）上の句の「（君ゆゑに）世にあらばや」と詠んでいるのは、いかがなものであろうか。

しかし、左の歌は不審なところがあるので、右の勝と思われる。

【注】〇おもひかね（恋しい）思いに堪えられなくなつて。〇せり芹。セリ科の多年草。湿地や水田に生え、芳香がある。若い葉と茎を食用とする。〇たなかの井ど 田中の井戸。田の中にある、わき水をためた所。田に水を引いたり種もみを漬けたりするために設けられた。『催馬楽』に、「田中の井戸に 光れる田水葱 摘め摘め吾子女 小吾子女 たりたり 田中の小吾子女」（田中）と歌われている。「水葱」は水葵の古称で、ミズアオイ科の一年草。湿地に生え、古くは若葉を食用とした。ただ俊成が判詞に引く「田中の井戸に袖ぬれてあふことなきの」と詠んだ歌は所在未詳。〇よにあらばやあまりやはかりならむ 『新編国歌大観』には文末が「……あまりやばかりならむ」の形で見え、『平安朝歌合大成』には「世にあらばや」あまり「や」ばかりならむ」として見えるが、意味が通じ難い。群書類従本・歌合部類版本に「よにあらばやといへるいかがならむ」とあるのは改訂本文かもしれないが、一応これによって「通釈」を記した。

【考察】左の歌は、恋するつらさを忘れ得るかと芹を摘んでいると、「田中の井戸」に袖がぬれたと詠む。「袖ぞぬれぬる」は、井戸の水で袖がぬれることに託して涙を流す心を表したのであろう。「田中の井戸」は、「注」に引いたように、催馬楽の、田中の井戸のほとりの水葱を摘めと少女に呼びかける形の歌謡の言葉を取り入れたと思われる。ただ左歌はそこで摘むのを水葱でなく芹にしている。

右の歌は、君恋しさの故にこの世に生きていたいと思う、死んで会える道を知らないので、と詠んでいる。「恋ひ死ぬ」ことは『万葉集』以来恋歌に多く詠まれるが、これはそのバリエーションの一つで、次の一首などと同様の趣の作であろう。

恋ひ死なむことぞはかなき渡り河あふ瀬ありとは聞かぬものゆゑ
（『重家集』三四四、『千載集』七六二）

俊成の判詞は、左の歌については、歌の特徴を「をかしく思ひよれる」点に認めている。これは催馬楽の「田中」の歌詞を取り入れたことを言

ったのであろう。ただ「田中の井戸」のあたりで摘むものを「水葱」でなく「芹」に替えたのは問題と見ていいらしい。

右の歌については、下句を「優」と評価する一方、上句の「君ゆゑに」世にあらばや」と詠んだあたりを問題視しているようである。これは、「世にあらばや」と詠んだ歌が一般に見いだしにくいことを考慮すると、当時の歌人一般の感覚から外れるところがあったのであろうか。すると、現実的であり過ぎると見られたのであろうか。ただし、それは問題点として左歌の場合よりも軽微なものと俊成は考えたらしく、「左おほつかなきところあれば」という理由で、右の勝としている。

十四番 左持

心 覚

三九いざなみの神ならねども恋すればよるひるわかずねをのみぞ泣く

右

俊 恵

四〇きぬぎぬになるべき人もなきものを明けぬと鳥の誰につぐらん

左歌、事及日本紀、世乱れてわづらはしくは侍めれど、よるひるねをのみなくといはんためばかりは、なにごとによせてもおほくありなんを、やむことなき神代の御事、あらはさずともや侍るべからん。右歌、すがたことばをかしきはきこゆるを、これはまた、ひとりねのあかつき、鳥のねきけるばかりにて、恋のこころやすくわからむ。鳥きこゆれど、きぬぎぬならずして、つまなどをおもひいでむこと、おほえ侍る。この、あけぬとりのなどいへるけしき、ふるくこひの道になれにける人にやとあはれに、うたのさまもをかしくこそおほえ侍れど、左もいざなみのみことなど侍れば、いかがおろかにはとて、なほちとす。

【通釈】

十四番 左持

心 覚

三九いざなみの神（に対して）の場合ではないけれど、恋をすると、夜となく昼となく泣き続けるばかりです。

右

俊 恵

四〇きぬぎぬの別れをするような人もない身というのに、夜が明けたと、鶏はだれに知らせているのだらう。

左の歌は、詠まれた事が日本紀に見えるところに及んでおり、異なる時代が入りまじって煩わしい感じがするようですが、夜も昼も泣き続けると言うためだけのことであれば、何事に関連させても適当な事は多々あるに違いないのに、特に恐れ多い神代の御事を用いて詠まなくてもよいのではないかと思うのです。右の歌は、その姿も言葉も面白くは思われますが、これはまた、独り寝の晩に鶏の声を聞いたというだけのこと、恋の心が乏しいであらうかと思う。鶏の声が聞こえても、きぬぎぬの別れでなくて、（離れている）妻などを思い出すようなこともあると思われます。（しかし）この「明けぬとりの」などと詠んだ様子は、久しく恋の道にかかわった人（のしわざ）であらうかと心をうたれ、歌の姿も面白とは思われるのですが、左の歌も、いざなみの神などと詠まれていますので、疎略に扱うわけにはゆかないと考えて、やはり持と判定する。

【注】〇いざなみの神ならねども いざなみの神に対しての場合ではないけれど、の意であらう。「いざなみの神」は、日本神話で、男神のイザナキの命とともに国生みを行った女神、イザナミの命。この神に関して左歌の末尾に言う「泣く」ことに結びつく話は、『古事記』『日本書紀』を通じて、イザナミの命の死去の際にイザナキの命が悲しんで泣いた話と、後に生まれたスサノヲの命が母イザナミの命のいる根の国に行きたいと泣き続けた話である。〇ねをのみぞ泣く 泣く意味の「音を泣く」を強めた表現。〇きぬぎぬ 男女が共寝をする時に二人の衣を重ねたのを、翌朝それぞれ衣をとって別れること。〇日本紀 『日本書紀』の異称。〇世乱れて この言葉の前に、左歌が『日本紀』に見える神代の事に触れて詠んでいると言う点から見て、異なる時代が入りまじって、の意か。群書類従本には、この言葉はない。〇やむことなき 恐れ多い。〇いかがおろかには どうして疎略に扱うことができようか。

【考察】左の歌は、いざなみの神に対しての場合ではないが、恋をする身

のつらさに泣き続けるばかりだ、と詠む。恋の歌に神話の世界を素材として詠み入れた点が目新しいが、俊成が判詞で言うように、違和感がないかどうかは問題であろう。

右の歌は、きぬぎぬの別れをするような相手もない独り寝であるのに、夜が明けたと鶏はだれに知らせるつもりで鳴くのだろう、と詠む。きぬぎぬの別れの時を告げる鶏の声を素材として生かした作である。

俊成の判詞は、左歌については、恋のつらさに泣くことを詠むのに遠く神代のことを引き合いに出した点を批判している。違和感を伴いそうな点で、適切な指摘であろう。

右歌については、全体として「姿ことばをかしく」思われると評している。ただ題の恋の心が不十分とも見えることを問題点としているが、「明けぬとりの」などと詠んだあたりは「あはれに」も思われると評価する。これは伝統的な美意識に基づく評価のようである。

勝負の判定に当たっては、左歌がいざなみの命のことを詠み入れているので疎略に扱えないと言い、持としている。神に関する歌は負とすることを避ける歌合判定上の慣行に従ったものと見られる。